

観奈遺跡

—町道6-4号線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2018

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

觀 奈 遺 跡

—町道6・4号線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2018

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会





かん な い せき
観 奈 遺 跡

—町道6-4号線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2018

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

序 文

長野原町内には、縄文時代中期後半の拠点集落である長野原一本松遺跡・横壁中村遺跡や天明3年の浅間山の大爆発により発生した泥流被災状況を伝える東宮遺跡・小林家屋敷跡に代表されるように、多数の貴重な遺跡の存在が知られています。

教育委員会では、文化財保護事業の一環として、町の貴重な文化遺産である遺跡を保護するとともに、失われていく遺跡の記録保存に努めています。

観奈遺跡はこれまでの分布調査で、平安時代の散布地であることが知られています。今回報告する調査は、町道6-4号線道路改良工事に伴う調査であります。調査面積は僅かでしたが、縄文中期前半の土坑が発見され、これまでの遺跡の内容を更新することができました。本書が町民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、郷土長野原の歩んできた道のりを知る一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたって各方面から多大なるご指導・ご協力をいただき厚く御礼申し上げます。

平成30年3月

長野原町教育委員会

教育長 市村 隆宏

例　　言

1. 本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字大津字観奈に所在する観奈遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は町道6-4号線道路改良工事に伴う事前調査として、長野原町役場建設課の委託を受けた長野原町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査から調査報告書作成に至るまでの調査事業費は長野原町役場の全額負担による。
4. 調査は発掘調査を平成28年9月13日から9月26日迄、整理調査及び報告書作成を平成28年9月27日から平成29年2月28日迄、同年11月1日から平成30年2月28日迄の期間実施した。
5. 本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真は全て長野原町教育委員会が保管している。
6. 本書は富田孝彦が編集・執筆した。各作業分担は以下の通りである。

編集・執筆：富田　道構	遺物写真撮影：富田　土器および礫石器実測・トレース：柿本
剥片石器実測：(株)歴史の杜	剥片石器トレース：向出　　図版および写真図版作成：富田・向出
7. 調査において以下の項目の一部を委託した。

表土掘削・埋め戻し：東光建設株式会社
測量：(株)測研
剥片石器実測：(株)歴史の杜
8. 本書における縄文土器に関しては山口逸弘氏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）に御教示いただいた。
9. 発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。（五十音順敬称略）

麻生敏隆・飯森康広・石田　真・小野和之・黒岩敦史・黒澤照弘・齊藤利昭・閔　俊明・藤巻幸男・
向出博之・村上章義・山口逸弘・吉田智哉・(株)測研・(株)歴史の杜・群馬県教育委員会・
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
10. 調査組織は次の通りである。

教育長　市村隆宏
教育課長　矢野今朝治
教育課補佐　富田孝彦（文化財係長兼務）
文化財係　市川勇氣（社会教育係兼務）・細川剛史（地域おこし協力隊）
調査参加者　柿本六美・坂井春栄・向出治恵

凡　　例

1. 本書で使用した地図は1:2500「長野原都市計画図」(長野原町1994)、1:25000「長野原・大前」(国土地理院1997)である。
2. 採図の方位は磁北を示す。
3. 採図の縮尺については下記の通りであり、各採図中に示してある。

遺構: 土坑	… 1/30
遺物: 複元土器	… 1/4
土器片・礫石器 … 1/3	
剥片石器	… 1/1
4. 遺構の略号については以下の通りである。 SI: 橫穴式住居跡 SK: 土坑
5. 採図に図示した遺物は、観察表にその内容を記してある。観察表における複元土器の法量は左側から器高、中央が口径、右側が底径を表し、計測数値は推定値を含む。() 内の数値は現存値、< >内の数値は複元値を表す。
6. 土器の色調に関しては、「新版標準土色帖1995年後期版」(編・著小山正忠・竹原秀雄、監修農林水産省農林水産技術会議事務局、色票監修財團法人日本色彩研究所)の色名を参考にした。観察表において外面／内面の順で記した。
7. 採図中のスクリーントーン・記号は以下の通りである。

遺構・土層図



地山

遺物



磨面

● 土器

▲ 石器

目 次

例 言	
凡 例	
第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第1節 遺跡の位置	3
第2節 周辺の遺跡	3
第3節 基本土層	11
第3章 検出された遺構と遺物	19
第1節 土 坑	19
第2節 遺構外出土遺物	26
第4章 調査の成果と課題	30
遺物観察表	
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の道路 (1/25,000)	4
第2図 調査地点位置図 (1/5,000)	10
第3図 基本土層 (1/20)	11
第4図 調査区全体図 (1/60)	18
第5図 SK01 ~ 03 実測図 (1/30)	20
第6図 SK04・05 実測図 (1/30)	22
第7図 SK06 ~ 08 実測図 (1/30)	24
第8図 土坑出土遺物実測図	25
第9図 遺構外出土遺物実測図 1	27
第10図 遺構外出土遺物実測図 2	28
第11図 遺構外出土遺物実測図 3	29

挿 表 目 次

第1表 周辺の道路	5
第2表 観察遺跡出土遺物観察表	32

図 版 目 次

P L 1	1. 調査区全景 (北から) 2. 調査区近景<北東側> (南から)	P L 4	1. SK05 (北西から) 2. SK05 半裁 (北西から)
P L 2	1. 調査区近景<南東側> (南東から) 2. SK01・05 ~ 08 (南西から)		3. SK06 東西セクション (南東から) 4. SK06 北セクション (北東から)
P L 3	1. SK01 半裁 (北西から) 2. SK02 (北東から) 3. SK02 半裁 (南東から) 4. SK03 (北西から) 5. SK03 半裁 (北西から) 6. SK04 北西セクション (北西から) 7. SK04 南東セクション (南東から) 8. SK04 検出状況 (南西から)		5. SK06 南セクション (南東から) 6. SK07 半裁 (北西から) 7. SK08 半裁 (南から) 8. 作業風景 (北東から)
		P L 5	土坑出土遺物
		P L 6	遺構外出土遺物①
		P L 7	遺構外出土遺物②

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

平成28年1月下旬に長野原町役場建設課より、町道6-4号線の道路改良工事の計画が策定され、埋蔵文化財の取り扱いについて、長野原町教育委員会教育課文化財係に照会があった。照会地は周知の包蔵地「観奈遺跡（No.105）」の範囲内に含まれていることから確認調査の必要がある旨を説明し、調査実施で合意を得た。文化財保護法第94条第1項の規定により、同年6月15日付けて関係書類（「発掘届」・「開発に伴う文化財調査願書」）が提出された。同年9月7日～12日に教育委員会文化財担当の立会いのもと、対象地内に4本の試掘坑（トレンチ）を設定し、遺構の有無および土層の堆積状況の事前調査を行った。その結果、3トレで表土下70～80cmで縄文時代中期前半の土坑1基が存在することが判明したので、その周辺を計画されている道路幅まで括げて施工前に発掘調査（記録保存）する必要があると判断し、その旨を開発事業主に伝えた。協議の結果、工事計画の変更が困難であるため、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。同年9月13日付け長教社第97号で長野原町教育委員会を経由して長野原町役場建設課より群馬県教育委員会教育長へ「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。

第2節 調査の方法と経過

（1）発掘調査

a. 表土除去

表土除去は重機（バックフォー）を使用して行った。確認調査で表土から70～80cmの深さで遺物が出土することが判明していたので、そのことを念頭に表土から遺構確認面まで少しづつ掘り下げていった。遺物の出土が確認されるまでを重機でそれ以下は人力で除去した。重機のバケットの爪に鉄板を装着して遺構を傷つけないように配慮した。

b. 遺構確認

遺構確認は上述の表土除去後に人力で行った。周辺は抜根跡が多くあったが、掘り込みがないかジョレンで削りながら慎重に平面形を確定していった。

c. 遺構発掘及び遺物の取り上げ

遺構の発掘作業は、遺構の平面形を確定した上で土層観察用のベルトを設定し、遺構内の覆土の除去に着手した。住居跡・陥し穴の場合は長軸方向とその中心から長軸に対して直交方向に十字にベルトを設定し、土坑の場合は長軸に沿って半載して土層の観察を行った。

遺物の取り上げに関しては、単独と思われる破片は上層・下層・床面直上ごとに、個体もしくは遺物の集中している箇所は出土位置図（ドット図）を作成の上、取り上げ作業を行った。遺物出土位置図は1/20のスケールで作成し、標高値の記録を一点ずつ行った。

d. 実測図の作成及び遺構の写真撮影

実測図は土層堆積状況図、遺物出土位置図及び完掘状況遺構平面図を作成した。土層堆積状況図は遺構が遺物出土位置図と同様に1/20のスケールで作成した。完掘状況遺構平面図は光波測距儀を用いて行った。完掘遺構の変化点を三次元記録し、その場でパソコン・コンピューターにより現地での詳細な観察の上で結線し作成した。また、土層堆積状況図及び遺物出土状況（位置）図のポイントの位置も完掘状況遺構平面図作成時に記録した。測定したデータは公共座標値に変換後、加工・編集を行いCD-R等に保管した。

遺構の記録写真は土層断面、遺物出土状況、完掘状況の順で行った。カメラは一眼レフを用い、モノクロとカラースライドの2種類のフィルムを使用した。フィルムサイズはいずれも35mmである。またデジタルカメラも併用して撮影した。

(2) 調査経過

a. 発掘調査

発掘調査は平成28年9月13日から9月26日にわたり実施された。

9月13日、3トレ東端を中心に北西側・南東側へ計画されている道路幅まで調査区を拡張開始。

9月14日、3トレ拡張完了。1トレ南東端も焼土・炭化材を覆土に含む掘り込みが検出されていたため、拡張してみたが、現代の農業用マルチ等が含まれており擾乱と判断。

9月15日、遺構精査で縄文中期前葉土坑のほか、掘り込み多数検出。検出状況写真撮影。

9月16日、掘り込みの半蔵開始。

9月21日、掘り込みのうち8基の土坑以外は擾乱と判断。断面図、写真撮影。

9月23日、完掘、平面図、写真撮影。全体清掃開始。全景撮れず。測量は終了。

9月26日、全体清掃・全景撮影。撤収。

b. 整理調査・報告書作成

整理調査および報告書作成は平成28年9月27日～平成30年2月28日にわたり実施された。発掘調査によって得られた遺物はテンバコで3箱、現場で作成した図面類は20枚であった。整理調査は担当の他に作業員3名という体制であった。作業は複数遺跡の整理と併行して行われた。

遺物洗浄・注記作業は同年9月27日～9月29日まで実施した。

遺物の接合作業は注記作業と併行して同年9月28日～9月30日までに実施した。

遺物の実測・トレースは平成29年1月10日～1月31日までの調査や事業の合間に実施した。併せて写真撮影、遺物実測図版のデジタル編集を実施した。

遺構図版・写真図版のデジタル編集を同年11月1日～同年12月20日、併せて執筆作業は同年12月下旬～平成30年1月中旬にかけてを行い、1月下旬～2月下旬に編集の最終調整・校正、印刷製本を実施し、併せて保管用に資料・遺物の整理をして全ての作業を完結した。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置

観奈遺跡が所在する長野原町は群馬県の北西部、吾妻郡の南西隅に位置し、「鶴舞う形の群馬県」と上毛かるたに詠まれている鶴の尾部下端にある。北部は高間山（標高1,341m）・本白根山（標高2,171m）の両山系から成り吾妻川流域沿いに東西に延びている。南部は浅間山（標高2,568m）の裾野に広がる浅間高原地帯を経て長野県に接している。観奈遺跡は北部の吾妻川流域地帯に属し、吾妻川の支流である遼沢川の左岸段丘上に立地する。

遺跡は長野原町域の最北端、草津町との町村境付近に位置し、本町の遺跡分布域で最も北側に位置する遺跡の一つである。従って地形的には草津白根火山の山裾部にあたり、南東に傾斜している。この傾斜の基盤は草津白根山の初期に5回にわたり大量に噴出した太子火砕流の堆積物で構成されている。本遺跡の立地する段丘は遼沢川により開析された河岸段丘で、川からの比高差は約10mを測る（第1図）。この段丘は前述の太子火砕流堆積物を削って形成されている。この上の関東ローム層中には約11,000年前に噴出したと考えられる浅間・草津黄色軽石層（As-Ypk）が厚く堆積している。調査地点の標高は843m位である。

第2節 周辺の遺跡

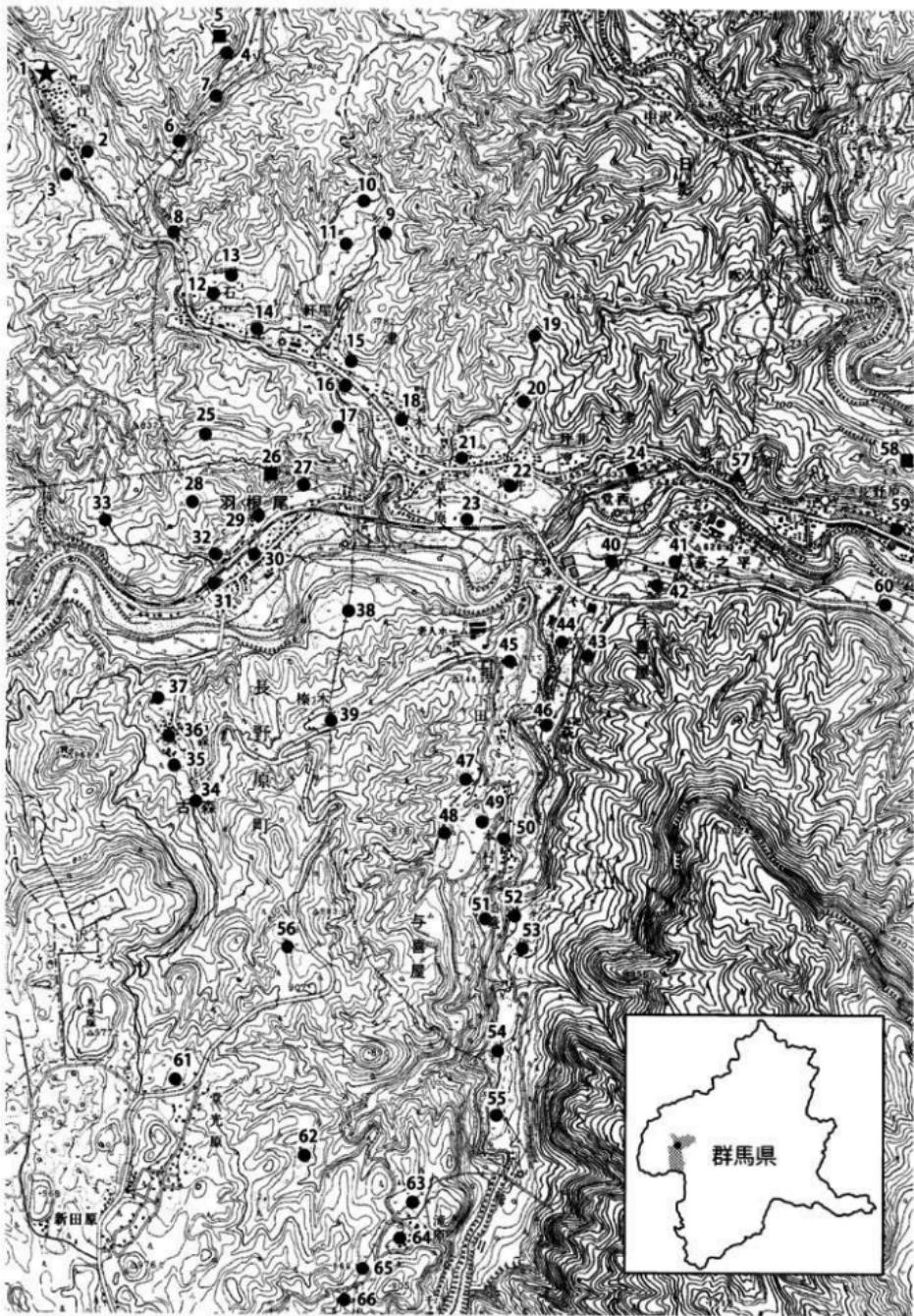
長野原町における遺跡分布状況は昭和48年に群馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和62年度から3ヶ年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199の遺跡包蔵地を確認した⁽¹⁾。また平成6年度からハッカダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が継続して調査を実施しており、新たな包蔵地の発見や遺跡名の変更などの必要性から平成14年3月と平成16年4月に遺跡地図の改訂を実施した。その後も小さな変更を繰り返しているが、平成29年12月現在で224の包蔵地（指定史跡等を含む）が把握されている⁽²⁾。

本遺跡の位置する吾妻川流域地帯は大きく東西に分けることができ、東部地区はダム湖及びダム関連事業と直結している地域、西部地区は東部寄りの大字長野原地区以外は基本的にはダム関連事業とは無関係の地域である。本遺跡はその西部地区に属している。

本遺跡を含む吾妻川流域地帯西部地区には多くの遺跡が分布している（第1図・第1表）。遺跡は基本的に吾妻川とその支流沿いの河岸段丘上に占地しているが近年丘陵上にも遺跡が発見されはじめ、これまで空白だった時期を埋める遺構も検出されている。ここでは調査を実施した遺跡を中心に当該地域の遺跡を概観したい。なお、長野原町の現時点での歴史観となるべく記載する立場から、筆者が実見したり、調査担当者に聞き取った未報告の情報を多分に含んでいる。従って本報告時には多少異なる見解になるかもしれないご注意願いたい。

（1）旧石器時代

これまでのところ長野原町では旧石器時代に遡る遺跡は確認されていない。柳沢城跡⁽³⁾で遺構外ながら細石器文化を作りと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが出土しているのみである。吾妻川流域は前述したように応桑泥流や浅間・草津黄色軽石層（As-Ypk）が厚く堆積しており、発掘調査では発見されにくい状況がある。西吾妻地域はもとより吾妻郡内でも旧石器時代は高山村に所在する新田西沢遺跡⁽⁴⁾でしか確認されていないのが現状である。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 ($S = 1/25,000$)

第1表 周辺の遺跡（数字は第1図と対応）

No.	道 路 名	町 No.	種 别	時 代	概 要	参 考
1	鏡奈遺跡	105	散布地	平安	本報告。	文献 2.34
2	洞口遺跡	104	散布地	平安		文献 2
3	向井遺跡	106	散布地	縄文・平安	縄文前期。石片	文献 2
4	長井岩陰群	107	岩陰			文献 2
5	長井鶴跡	108	城館跡	中世		文献 2.41
6	長井 I 遺跡	102	散布地	縄文・平安	縄文早期～中期、磨石、スクレイバー。金井長太郎氏寄贈町史	文献 2.35
7	長井 II 遺跡	103	散布地	平安	五輪塔、町史	文献 2.35
8	桑井遺跡	101	散布地	縄文・平安	縄文中期	文献 2
9	大久保 I 遺跡	99	散布地	縄文	中期。	文献 2
10	大久保 II 遺跡	100	散布地	不明		文献 2
11	赤羽根遺跡	98	散布地	縄文・平安	縄文中期。石器採集。	文献 1.2.33.34
12	カヌギ I 遺跡	96	散布地	縄文・平安		文献 2
13	カヌギ II 遺跡	97	集落跡	縄文	昭和 63 年度調査（町）。中期中葉～後期。住居跡 4 軒（うち敷石住居 3 軒）、中期中葉の埋設土器など出土。	文献 2.3.42.44.86
14	立石遺跡	95	散布地	縄文・平安	縄文中期～後期。磨製石斧・石器・石器・石器・石器採集。平成 16 年度調査（町）。縄文中期包含層検出。	文献 1.2.16.35 「県遺跡地図」No.3125
15	熊野遺跡	92	散布地	縄文	中期。平成 15 年度調査（町）。	文献 2.14
16	弁天遺跡	93	散布地	平安		文献 2
17	鹿生遺跡	94	散布地	縄文	中期。石器採集。	文献 2
18	勘場木石器時代住居跡	91	集落跡	縄文	県指定史跡。昭和 29 年度調査（県）。中期後半の住居跡 1 軒を検出。前期～後期の遺物が多數出土。本町で最初の本格的な発掘調査である。住居跡出土器は長野県の影響を強く受けしており、本地域の当該期上器の様相をいち早く報告した意義は大きい。	文献 1.2.35.37.42.45.48 「県遺跡地図」No.3125
19	寺沢遺跡	90	散布地	縄文	中期。	文献 2
20	寺久保遺跡	89	散布地	縄文・弥生・平安	黒曜石片・弥生後期土器片採集。	文献 2
21	高平遺跡	88	散布地	縄文・平安		文献 2
22	坪井遺跡	86	集落、墓その他	縄文・弥生・古墳・平安・中世	平成 3・10・12・14・23・24・26 年度調査（町）。縄文中期後半の複数集落。縄文前期初頭住居跡・土坑。後期副葬埴生坑、弥生中期住居跡・土坑、平安住居・窓穴、中世配石・集石遺構などを検出。遺跡内に「土毛古墳跡」記載の「鉄塚」あり。	文献 1.2.4.8.10.12.26.28.32.35.49.50.53.64.71.72 「県遺跡地図」No.3123
23	草木原遺跡	87	散布地 その他	縄文・平安・近世	縄文中期。磨製石斧採集。平成 17・20 年度調査（町）。天明煙 1 枚、縄文条石出。	文献 1.2.17.20.35
24	小林家屋敷跡	211	屋敷跡	縄文・近世	平成 13・14 年度調査（町）。天明配流に押出した吾妻の分限者小林助右衛門の屋敷跡。石垣 1 基・土蔵跡 1 棟・礎石建物跡 2 棟を検出。	文献 1.11.12.13.47.55.57.58.59.69.75
25	移坪遺跡	117	集落跡	縄文・平安	縄文中期土器・磨製石斧・凹面探査。平成 12 年度調査（町）。縄文前期前葉（二ツ木式）住居跡 2 料・土坑 2 基などを検出。	文献 2.9.10
26	羽根尾城跡	123	城館跡	中世	町指定史跡。吾妻川左岸、城山山の頂に立地。柳御式の山城で土壁・堀切が遺存している。羽根尾（羽野）氏の施城。	文献 1.2.35.36.38.41.42.59
27	羽根尾宮原遺跡	113	散布地	平安	平成 18・25 年度調査（町）。	文献 2.18.29 「旧宮原遺跡
28	宮の上遺跡	116	散布地	平安		文献 2
29	羽根尾 I 遺跡	112	散布地	平安		文献 2
30	羽根尾 II 遺跡	115	散布地	奈良		文献 2.
31	小浅 I 遺跡	114	散布地	平安		文献 2 「旧小浅遺跡
32	小浅 II 遺跡	220	その他	近世	平成 23 年度調査（町）。天明烟検出。	文献 26
33	馬々平遺跡	118	散布地	平安	打製石斧・磨石	文献 2
34	田之平遺跡	119	散布地	縄文	中期。	文献 2
35	中船跡	120	散布地	黒曜石片		文献 2
36	諏訪原遺跡	121	散布地	縄文	チャーフ片・石器採集。	文献 2
37	上古森遺跡	122	散布地	縄文・平安	中期。チャーフ片・磁器	文献 2
38	外輪原 I 遺跡	141	散布地	縄文	磨石・敷石採集。	文献 2
39	椿木沢遺跡	125	散布地	縄文	前期。	文献 2
40	旧新村跡	143	村落跡	近世	昭和 55 年度調査（町）。天明配流に埋没した村落。屋敷跡や雨水池などを検出。南側台地上に墓地がある。	文献 2.42.43.47.55.58.89
41	長嶺 I 遺跡	126	散布地	縄文	中期。平安 15 年度調査（町）。平安住居 1 軒・上坑 4 基検出。	文献 2.14
42	長嶺 II 遺跡	127	集落跡	縄文	石器採集。平成 2・21 年度調査（町）。前期住居跡 2 軒・中期後半住居跡 2 軒等検出。	文献 2.4.22.33.45
43	長嶺Ⅲ遺跡	128	散布地	平安		文献 1.2
44	萩原 I 遺跡	129	散布地	平安		文献 1.2.35
45	外輪原 I 遺跡	135	散布地	縄文・弥生・平安	平成 15・16 年度調査（町）。縄文早期包含層検出。遺跡内に「上毛古墳跡」記載の「五輪塚」あり。	文献 1.2.14.16.35.62.63 「県遺跡地図」No.3120
46	萩原 II 遺跡	130	散布地	縄文・平安	縄文中期。	文献 2
47	北沢 I 遺跡	136	散布地	縄文・平安	縄文中期。	文献 2
48	北沢 II 遺跡	137	散布地	縄文・平安	縄文中期。黒曜石片・内黒土器採集。	文献 2

No.	遺跡名	町No.	種別	時代	概 要	備考
49	上ノ平遺跡	138	散布地	縄文・弥生・平安	縄文前期～後期・弥生中期土器・太形船刃石斧等採集。平成24年度調査(町)。	文献 1.2.28.35 『県道跡地図』No.3122
50	与喜屋Ⅰ遺跡	139	散布地	縄文	石斧2片採集。	文献 1.2
51	与喜屋Ⅱ遺跡	140	散布地	縄文	中期・土器類採集。	文献 2 『県道跡地図』No.3121
52	虹電Ⅰ遺跡	131	散布地	縄文		文献 2
53	虹電Ⅱ遺跡	132	散布地	縄文・平安	縄文後期。	文献 2
54	山岸Ⅰ遺跡	133	散布地	平安	チャート片採集。	文献 2
55	山岸Ⅱ遺跡	134	集落跡	縄文・弥生・平安	平成24年度調査(町)。縄文前期末土坑1基・平安時代住居跡1軒・隣接3基検出。	文献 2.25.28
56	所舟遺跡	142	散布地	不明		文献 2
57	遠西岩陰部	83	その他	不明	岩陰2ヵ所にわたる。	文献 2
58	長野原城跡	85	城創跡	中世	百瀬川左岸、町の市街地北側の尾根上に立地。土塁・堀切・物見台などが遺存している。長野原合戦の舞台。平成24年度調査(町)。平成23年度調査(事)。天明烟焼出。	文献 1.2.35.36.38.41.42.59.91
59	町遺跡	219	その他	近世	平成23・24年度調査(事)。天明記述に埋没した建物跡1棟・掘7枚のほか、窓4基・小堀・治跡等に關連した羽口や狹サイ集中廻所1ヵ所を検出。平成25・26・28年度調査(町)。建物跡1棟・井戸1基のはか壙・道・歩道などを検出。	文献 2.32.92
60	向原遺跡	75	集落跡	縄文・弥生・平安	平成5・19・20年度調査(町)。縄文後期住居5軒(敷石住居2軒)・縄文中期後半埋穀2基・弥生中期土坑7基・平安住居11軒・隣接穴14基。時期不明土坑52基を検出。	文献 2.6.19.39.45.66
61	堂光原遺跡	184	散布地	縄文	黒曜石片採集。	文献 2
62	チガヤ遺跡	146	散布地	縄文・平安	磨削石採集。	文献 2
63	滝原Ⅰ遺跡	150	散布地	平安		文献 2
64	滝原Ⅱ遺跡	151	散布地	平安		文献 2
65	滝原Ⅲ遺跡	152	集落跡	縄文・平安	黒曜石片・磁器採集。平成8年度調査(町)。縄文後期初期敷石住居1軒・土坑2基を検出。	文献 2.7
66	滝原Ⅳ遺跡	153	集落跡	縄文・平安	平成25・26年度調査(町)。縄文中期前葉住居1軒・土坑2基を検出。	文献 2.29.30.32

(2) 縄文時代

縄文時代になると遺跡数も膨大となる。吾妻川及びその支流沿岸の下位段丘面は低調だが主として中・上・最上位河岸段丘および丘陵部に集落が展開する。

①草創期～早期

現在のところ、長野原町で人々の生活が確認されているのは草創期末～早期初頭からである。該期の遺跡として石畑I岩陰⁽⁵⁾がある。昭和53年に群馬県教育委員会により一部調査され、中期を除く草創期～晚期の土器片・獸骨などが出土している。特に草創期～早期の土器片には表裏縄文・撚糸文・押型文が認められる。平成26年度から國學院大學により學術調査が実施されている居家以岩陰群でも草創期～晚期の土器片・石器・獸骨・人骨が出土している。平成28・29年度の調査では岩陰部の灰層中から遺存状態の良い早期中葉の理葬人骨が10体確認されており、その数は今後も増えるだろう⁽⁶⁾。また横壁勝沼I遺跡⁽⁷⁾では草創期の槍形尖頭器が表採されている。近年、丘陵上での調査機会も増え、榆木II遺跡⁽⁸⁾・立馬I遺跡⁽⁹⁾・立馬III遺跡⁽¹⁰⁾で早期の集落が検出されている。榆木II遺跡では早期前半撚糸文期の住居跡が31軒検出され、遺構外で表裏縄文・押型文・沈線文・条痕文土器片も出土している。該期の住居跡検出数では県はもとより全国的にも有数である。また立馬I遺跡では撚糸文期の住居跡の他、沈線文(田戸下層式)期の住居跡も検出され、遺構外では押型文・条痕文をはじめ晚期までの土器片が連綿と出土している。立馬III遺跡では子母口式や稲荷台式・沈線文土器などの住居跡が検出されている。さらに同時期の遺物は、調査事例の多い東部地区に偏っており、三平I遺跡⁽¹¹⁾・三平II遺跡⁽¹²⁾・花畠遺跡⁽¹³⁾・中棚I遺跡⁽¹⁴⁾・立馬I遺跡⁽¹⁵⁾・幸神遺跡⁽¹⁶⁾・横壁中村遺跡⁽¹⁷⁾・山根III遺跡⁽¹⁸⁾・西部地区では坪井遺跡(22)で確認されているのみである。それまでの岩陰での生活から早期前半撚糸文期になると丘陵上のオープンサイトでの集落に移行していくようである。また石畑I岩陰に代表される岩陰遺跡は丘陵部の自然に迫り出した岩場を利用して居住・墓域とするものであるため、県内では分布・遺跡数ともに限定される。吾妻川流域はそのほとんどが河川や溪沢に沿う山岳傾斜地帯であることから岩陰遺跡の立地する条件を満たしているといえよう。岩陰遺跡は長野原町域で21遺跡34ヶ所確認されており、その大半がこの東部地区に集中している。この岩陰遺跡の多さは本町の原始古代の大きな特徴の一つでもある。

②前期

前期の遺跡も少ないが漸増の傾向にある。立地は丘陵上が多いが、河岸段丘へも集落が広がる傾向が見受けられる。前期前半の遺跡は東部地区より西部地区で顕著であったが近年の調査で東部地区的該期の状況が明らかとなってきた。坪井遺跡（22）で前期初頭（花積下層Ⅰ式期）の住居跡と土坑が検出され、土坑内で花積下層Ⅰ式土器と長野県で主体的な塚田式土器との共伴が初めて確認された。幕坪遺跡（25）では前期前葉（二ッ木式期）の住居跡、長歛Ⅱ遺跡（42）では前期前葉（関山式期）の土坑と前期前葉（黒浜式期）の住居跡・土坑が検出されている。東部地区では上原Ⅰ遺跡⁽¹⁹⁾で前期初頭の住居跡が15軒検出され、花積下層Ⅰ式土器が主体で塚田式が共伴するかたちが追認されている。樺木Ⅱ遺跡で前期前葉（黒浜式期）の住居跡が検出されている他、横壁中村遺跡では埋没河道で少量の破片が認められている。前期後半は樺木Ⅱ遺跡、三平Ⅰ遺跡、林中原Ⅰ遺跡⁽²⁰⁾で前期後葉（諸磯式期）の住居跡や土坑、川原湯勝沼遺跡⁽²¹⁾で前期末葉の土坑が検出されている以外は遺構外の出土である。

③中期

中期の遺跡は他時期に比して最も多い。中期前半は県内でも極めて限られた検出事例で少ないが、丘陵上あるいは最上位段丘に占地しているようである。後半になると河岸段丘の平場を中心として積極的な居住区域を展開している。中期前半の集落は近年東部地区的丘陵上あるいは最上位段丘の遺跡で発見されはじめている。中期初頭（五領ヶ台式期）の遺跡は樺木Ⅱ遺跡で住居跡3軒、上原Ⅱ遺跡⁽²²⁾で屋外焼土遺構を伴う竪穴状遺構が3基・土坑21基、上原Ⅳ遺跡⁽²³⁾で土坑1基が確認されている。中期前葉（阿玉台式期）の遺跡は立馬Ⅱ遺跡で五領ヶ台式期～阿玉台式期の住居跡11軒・土坑100基ほど、林中原Ⅰ遺跡で住居跡が1軒、幸神遺跡で土坑が検出されている。横壁中村遺跡では中期中葉（勝坂式期）の住居跡、西久保Ⅰ遺跡⁽²⁴⁾では同時期の土坑が確認されている。中期中葉（焼町類型期）の遺跡は幸神遺跡で焼町土器の深鉢を炉体土器とした住居跡、林中原Ⅱ遺跡⁽²⁵⁾と横壁中村遺跡では焼町土器を主体とする住居跡がそれぞれ1軒ずつ確認されている他、上ノ平Ⅰ遺跡⁽²⁶⁾では同時期の住居跡が12軒検出された。西部地区では滝原Ⅳ遺跡（66）で初めて中期前葉の住居跡が検出され、本遺跡で土坑が8基検出された他はクヌギⅡ遺跡（13）で中期中葉の埋設土器、山岸Ⅱ遺跡（55）で遺構外で少量の破片が認められているのみである。中期後半になると列石を伴う拠点集落が吾妻川流域地帯に分布を広げて出現する。長野原本松遺跡⁽²⁷⁾、横壁中村遺跡を筆頭として近年の調査により林中原Ⅰ遺跡、林中原Ⅱ遺跡、東宮遺跡、石川原遺跡が新たに加わり⁽²⁸⁾、西部地区では坪井遺跡（22）に代表される。遺跡を大規模に調査している前6者に共通するのは中期後半に引き続き、後期前半（～加曾利B式期）まで継続して集落が営まれていることである。また坪井遺跡は前2者に比して規模は小さいが、弧状石列1基、住居跡19軒（拡張住居含む）、土坑49基が検出されている。土器は大きく4系統（①加曾利E式土器<北関東系>、②曾利・唐草文系土器<信州系>、③郷土式土器<①と②の融合型式>、④柄倉Ⅱ式土器<越後系>）が認められ、特に③の郷土式土器が該期の主体となる時期であり、環浅間山地域に分布し、小文化圏を形成していることが最近分かってきている。この坪井遺跡出土土器の傾向は前6者出土土器、さらに県指定史跡「勘場木石器時代住居跡」（18）出土土器にも看取される。その他、向原遺跡（60）では中期末～後期初頭の敷石住居跡が検出されており、立地から拠点集落のひとつになる可能性が高い。最近の調査では尾坂遺跡⁽²⁹⁾で中期後半の住居跡が6軒検出されており、うち3軒が敷石住居で出現期の可能性がある。尾坂遺跡の対岸に位置する久々戸遺跡⁽³⁰⁾でも中期末の遺存状態の良い敷石住居が1軒検出され、町で移築保存することとなった。

④後期

後期の遺跡は規模は縮小するものの吾妻川流域の比較的広い範囲に分布する。ただし遺構の検出は後期前半までで後半は不明である。上記の中期後半の遺跡の他、西部地区では本町で初めて敷石住居跡を検出したクヌギⅡ遺跡（13）、向原遺跡（60）、滝原Ⅲ遺跡（65）、古屋敷遺跡⁽³¹⁾、東部地区では上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡、林中原Ⅰ遺跡⁽³²⁾に代表される。後期初頭（称名寺式期）～後期中葉（加曾利B式期）までの敷石住居跡、掘立柱建物跡は

長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡で多く検出されている。長野原一本松遺跡では壁に板材の痕跡を遺す柄鏡形敷石住居跡や方形周縁を明瞭に遺す柄鏡形敷石住居跡が確認されている。また横壁中村遺跡では主輪全長9mにも及ぶ大形の柄鏡形敷石住居跡や配石墓群が検出されている。その他、林中原Ⅰ遺跡、林中原Ⅱ遺跡、上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡でも後期初頭～前葉（称名寺式期～堀之内式期）の敷石住居跡等が検出されている。後期後葉（高井東式期）は横壁中村遺跡で住居跡が3軒、久々戸遺跡で土坑が検出されているのみである。遺構は不明瞭ながら石川原遺跡では後期後半～晚期前半の配石遺構が検出されている。後期終末（安行1・2式期）に関しては横壁中村遺跡や立馬Ⅰ遺跡で土器片が出土しているがいずれも遺構外である。

⑤ 晩期

晩期に関してはこれまで石畳Ⅰ岩陰で土器片が出土している他、横壁中村遺跡で晩期末葉（千綱式併行）の包含層が確認されているだけであった。遺構の検出は晩期前半は前述の石川原遺跡以外は依然少ないものの、後半（特に末葉～弥生中期）に関しては最近の調査が増えつつある。立馬Ⅰ遺跡では晩期末葉の住居跡1軒、横壁中村遺跡では晩期末葉の住居跡2軒、埋甕1基、上原Ⅳ遺跡・西ノ上遺跡では土坑1基が検出されている。立馬Ⅰ遺跡では南信松本盆地に分布する女鳥羽川式土器が出土している。さらに川原湯勝沼遺跡からは該期の土坑が数基検出され、その中の1基は壺棺再葬墓であることが判明している。同一土坑に2個体が埋置されており、ひとつが中沢氏のいう「氷式突垂壺」⁽³³⁾の上部が逆位に、もう一方は浮線文系の半精製甕が正位の状態で出土している。この壺棺再葬墓は東日本でも最古級として注目されよう。その他、遺構外ではあるが、久々戸遺跡⁽³⁴⁾では氷式土器の浅鉢、向原遺跡（60）で大洞A'式まで遡ると考えられる土器片も確認されている。

（3） 弥生時代

弥生時代の遺跡は分布調査の時点で後期に属する3遺跡のみであったが、縄文時代晩期末葉から弥生中期前半までの資料が増えてきている。遺跡は丘陵上あるいは最上位段丘に立地する傾向が強く、縄文時代早期や中期前半と共に通しているようである。東部地区では長野原一本松遺跡では中期前半までと考えられる土坑1基、横壁中村遺跡では埋甕（再葬墓か）1基が検出され、東海地方に分布する櫛王式土器の甕が出土している。下原遺跡⁽³⁵⁾では集石遺構から中期前半を中心とした遺物が認められた。未報告ではあるが、林中原Ⅱ遺跡⁽³⁶⁾では中期前半と考えられる住居跡4軒の他、前期末に遡る土坑墓（再葬墓か）、尾坂遺跡⁽³⁷⁾でも前期末の再葬墓と思われる土坑や完形土器2個体を出土する土坑、貯藏穴など、上原Ⅰ遺跡⁽³⁸⁾では前期末の短頸甕を納めた土坑、三平Ⅰ遺跡では前期末～中期前半の土坑が数基検出されている。西部地区では遺物出土量が少なく時期が判然としないものが多いが、坪井遺跡（22）でも中期初頭と考えられる住居跡1軒、土坑が5基、向原遺跡（60）では前期に遡るものも含めて中期前半までの土坑が7基確認されている。遺構外では外輪原Ⅰ遺跡（45）、上ノ平遺跡（49）で中期前半までの資料が比較的まとまっている。中期後半に関しては、立馬Ⅰ遺跡で住居跡2軒と土器棺墓2基を含む土坑が数基、また坪井遺跡では栗林1式期の土坑1基、後期に関しては、石畳遺跡⁽³⁹⁾で土坑1基が確認されているのみである。分布調査時に居家以岩陰群、寺久保遺跡（20）、新田原Ⅰ遺跡で土器片が表採されている他、立馬Ⅰ遺跡では遺構外で、二社平遺跡⁽⁴⁰⁾周辺で後期～古墳時代前期に比定される土器片が表採されている。

（4） 古墳時代

これまで遺構外では他時期の遺物に混入するかたちで5世紀後半の土器片は坪井遺跡（22）、長野原一本松遺跡、二社平遺跡などで確認されてきたが、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。平成15年度に最上位段丘面に立地する林宮原遺跡⁽⁴¹⁾で5世紀末～6世紀初頭の住居跡が1軒検出されたのが初例である。これに続いて平成16年度の調査で川原湯勝沼遺跡で焼土を伴う土坑から同時期の土師器と遺構外で剣形模造品、下原遺跡でも同時期の住居跡1軒の他、土師器片がまとまって出土している。最近の調査では上原Ⅳ遺跡⁽⁴²⁾でも5世紀後半～6世紀初頭の住居跡が2軒検出されている。これらは吾妻川に直面した最上位・中位段丘

面の自然流路あるいはその周辺で出土していることから水に関連した祭祀遺構の可能性が高い。これら4遺跡で検出された遺構は周期的にほぼ合致しており注目される。さらに上原I遺跡⁽⁴³⁾で前期と考えられる住居跡から台付甕や埴形土器が出土し、中期の高坏を包含する土坑も検出され、これまで空白であった時期の遺構検出事例が徐々にではあるが大規模調査の成果として増えてきている。

また昭和13年に刊行された『上毛古墳綜覧』によれば、大津地区の「鉄塚」(22)、与喜屋地区の「五輪塚」(45)が前方後円墳と報告されている。また昭和11年刊行の『群馬県吾妻郡誌』では林地区の「御塚」が古墳とされ、合計3基が古墳とされている。「五輪塚」は現況で畠としてならされているが、「鉄塚」と「御塚」は円形の形状を保ち、現在は墓地として利用されている。その他、「てつか（てづか）」や林地区中棚にある「砂塚」に関しては『長野原町誌』で「宮内地区的「てづか」は鉄塚の訛音ではあるまいか。鉄塚の地名には城跡や屋敷跡などに多いといわれ、砂塚との対照がおもしろい」とあり、古墳という認識ではないが同じ林地区に少なくとも「塚」と付くものが3基あるということが注目される。いずれも古墳とするには根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

(5) 奈良・平安時代

奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾II遺跡(30)のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、绳文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。調査した遺跡を挙げれば、西部地区では、坪井遺跡(22)、向原遺跡(60)、長畝I遺跡(41)、長畝II遺跡(42)、山岸II遺跡(55)、東部地区では東宮遺跡⁽⁴⁴⁾、上ノ平I遺跡、三平I遺跡、下湯原遺跡⁽⁴⁵⁾、西ノ上遺跡⁽⁴⁶⁾、石川原遺跡⁽⁴⁷⁾、川原湯勝沼遺跡、立馬I遺跡、東原I遺跡⁽⁴⁸⁾、榆木I遺跡⁽⁴⁹⁾、榆木II遺跡⁽⁵⁰⁾、花畠遺跡⁽⁵¹⁾、下原遺跡、中棚I遺跡⁽⁵²⁾、上原I遺跡⁽⁵³⁾、上原III遺跡⁽⁵⁴⁾、上原IV遺跡⁽⁵⁵⁾、林宮原遺跡⁽⁵⁶⁾、横壁勝沼I遺跡、山根IV遺跡⁽⁵⁷⁾、上野I遺跡⁽⁵⁸⁾、上野II遺跡⁽⁵⁹⁾、横壁中村遺跡、長野原一本松遺跡、尾坂遺跡などから住居跡や掘立柱建物跡、陥し穴などが検出され、該期集落として把握されている。この中で榆木II遺跡では9世紀後半～10世紀前半の住居跡が38軒、竪穴遺構3基が検出され、「長・「三家」の墨書士器と刻字「称」をもつ石製紡錘車、上ノ平I遺跡では住居跡が20軒検出され、県内2例目となる皇朝十二銭「貞觀永寶」が出土しており注目される。この他、未報告ではあるが、上原III遺跡では鍛冶工房跡1軒・住居跡11軒・焼土遺構6基・陥し穴29基など、中棚I遺跡では住居跡4軒が検出され、そのうち全容が判明した2軒は一辺が6mを超える大形住居であった。このうちの1軒からは「赤」の墨書が大量に出土しておりその性格が注目される。

(6) 中世

吾妻流域地帯には中世城館跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城跡(26)、長野原城跡(58)、丸岩城跡⁽⁶⁰⁾、柳沢城跡⁽⁶¹⁾、金花山砦跡⁽⁶²⁾などがあり、その他に林城跡⁽⁶³⁾、中棚の砦跡⁽⁶⁴⁾などといわれている箇所も存在する。これらはいずれも山城である。この中で丸岩城は「丸屋の要害」として『加沢記』にも記され、節理の発達した岩山の山頂に立地している。この丸岩城跡の北西麓に里城としての柳沢城跡が位置し、山城部と丘城部から成る本城を構えている。この柳沢城跡の一部が発掘調査されており、郭跡・堀切・土居・礎石建物・腰曲輪・石組遺構・溝・柵列などが検出されている。遺物のほとんどが礎石建物から出土しておりかつ豊富である。陶器・鉄製品・銅製品・石臼などが出土しており、特に陶器類は常滑系大甕・古瀬戸三耳壺・古瀬戸菊皿・珠洲系陶器甕の他、輸入陶磁器である景德鎮窯梅瓶などが準完形で出土している。また最近の調査で林中原I遺跡範囲内に林城跡が確認され、その範囲や構造が明らかになりつつある。金花山砦跡は明治期の絵図『川原湯真図』に「トリデアト」の記載があったことから平成12年度に町教委と事業団で踏査して堀切などを確認した。

近年は河岸段丘面の遺跡でも該期の遺構が検出されはじめており、集落として把握されるようになっている。それらを例挙すると立馬I遺跡、榆木II遺跡、二反沢遺跡⁽⁶⁵⁾、下原遺跡、林宮原遺跡、横壁中村遺跡、西久保I遺跡、長野原一本松遺跡、尾坂遺跡となる。このうち、横壁中村遺跡と下原遺跡では石垣で区画された屋敷跡がそれ

ぞれ1棟、長野原一本松遺跡では掘立柱建物群と竪穴状遺構、榎木II遺跡でも掘立柱建物群、二反沢遺跡では区画跡のほか羽口や鉄サイなど鍛冶関連遺構などが検出されており注目される。

(7) 近世

長野原町は浅間火山・白根火山の麓に位置し、古くから度重なる火山災害を被っていることが地層からも窺える。浅間火山の主な噴火活動を概観すれば、すでに9万年前には黒斑山は活動をはじめており、2.4~2.1万年前に黒斑山崩壊を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応桑泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称で呼ばれている。その後は仏岩火山の活動期で浅間板鼻黄色軽石(As-YPk)降下をもたらした。1万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火により縄文時代中期の浅間D軽石(As-D)、4世紀の浅間C軽石(As-C)、天仁元(1108)年の浅間B軽石(As-B)、天明3(1783)年の浅間A軽石(As-A)という4つの大きなテフラがもたらされた。これらは、浅間山の活動史を如実に物語る証であり、群馬県内の考古年代の指標にもなっている。の中でも天明3(1783)年の噴火は軽石降下後に襲った泥流(鎌原火碎流)により吾妻川・利根川流域沿いの町村に甚大な被害をもたらし、有史以来の記録的火山災害として知られている。この泥流によって埋没した嬬恋村の旧鎌原村が昭和54年から調査され、「延命寺観音堂の石段」、「十日ノ窪」など天明の大噴火における被災遺跡として注目を集めたが⁽⁶⁶⁾、翌年に本町でも山間地域若者定住環境整備モデル事業として陸上自衛隊によるグランド造成中に日待供養塔・石臼・農具などが出土し、旧新井村跡(40)の痕跡が確認された。平成14年度には町立中央小学校の屋内体育館・プールの新築に伴って、当時の分限者小林助右衛門屋敷の一部が発見され(24)、石垣・土蔵・礎石建物跡が調査されている。また平成16年度には長野原市街地における下水道工事で建築部材・薬缶・鉄釜・石臼の他、「青面金剛塔」が泥流中から出土しており、旧長野原村が壊滅的状況であった一端を垣間見る発見があった⁽⁶⁷⁾。さらに平成20年度に草木原遺跡(23)、平成23年度に小滝II遺跡(32)で天明泥流に埋没した畠跡が検出され、立石村・羽根尾村の被災状況も確認された。

近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により、これまで認識されていなかった下位・中位段丘で泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見された。それらを列挙すると、嶋木I遺跡⁽⁶⁸⁾、東貝瀬III遺跡⁽⁶⁹⁾、町遺跡(59)、下田遺跡⁽⁷⁰⁾、下原遺跡⁽⁷¹⁾、中棚II遺跡⁽⁷²⁾、西宮遺跡⁽⁷³⁾、東宮遺跡⁽⁷⁴⁾、石川原遺跡、石畠遺跡、西ノ上遺跡⁽⁷⁵⁾、川原湯勝沼遺跡⁽⁷⁶⁾、横壁勝沼I遺跡、横壁中村遺跡、西久保IV遺跡⁽⁷⁷⁾、西久保V遺跡、尾坂遺跡⁽⁷⁸⁾、久々戸遺跡⁽⁷⁹⁾などがあり、現在も継続調査中である。これらの遺跡では主として烟跡・ヤックラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造物などが検出されている。現時点での成果として天明泥流に埋まった烟景観の復原や「ツカ」や平坦面から推定される「単位烟」の構造、さらには泥流とその逆級化構造のメカニズムなどに関して詳細な検討がなされている。また東宮遺跡、西宮遺跡、石川原遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡などでは民家跡も検出されている。特に東宮遺跡は泥流に



第2図 調査地点位置図 (S=1/5,000)

埋没した川原畠村を面的に調査した貴重な発見である。建物跡が14棟のほか畠20区画・道3条・溝6条・石垣10基・集石1基・土坑8基を検出した。通常遺存しない建築部材や漆器など植物遺存体の検出例が多く、当時の川原畠村の景観復原はもとより、近世建築学、民俗学など多角的な分析に寄与する部分が大きいと考えられる。さらに隣接する西宮遺跡では埋没畠とともに南北方向に10数本の復旧溝が検出され、被災後の復旧の痕跡が本町ではじめて確認された。

また推定される泥流到達範囲外でも該期の遺構・遺物は確認されている。林中原Ⅱ遺跡⁽⁸⁰⁾、上原Ⅳ遺跡、榆木Ⅰ遺跡、二反沢遺跡、幸神遺跡、長野原一本松遺跡が該当する。このうち林中原Ⅱ遺跡と榆木Ⅰ遺跡では近世礎石建物跡、上原Ⅳ遺跡では溝（旧河川流路）を検出しているがそこから下駄や曲物の底・農具・石鉢・陶磁器など生活道具が出土している。

第3節 基本土層

本遺跡の基本層序は第4図のA地点で確認した。発掘調査での所見と併せると以下のようになる。

第Ⅰ層 暗灰褐色土

いわゆる表土で、上位は畠の耕作土である。拳大の礫を多く含む。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

第Ⅱ層 暗褐色土

黄褐色軽石を多く含んでいる。締まりは強い。全体的に茶褐色を呈しているが上位は黒色味が強い。

第Ⅲ層 暗褐色土

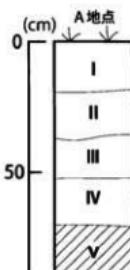
黄褐色軽石およびローム粒を多く含んでおり、縄文時代中期前半の遺構はこの層中を掘り込んで構築されている。締まりは強い。

第Ⅳ層 明褐色土

いわゆる漸移層で、締まりは強い。

第Ⅴ層 黄褐色土

いわゆる関東ローム層でスコリアを少量含んでいる。粘性・締まりともに強い。



第3図 基本土層 ($S = 1/20$)

註

1. 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡－町内遺跡詳細分布調査－』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
2. 主に下位・中位段丘で発見された天明泥流に埋もれた遺跡を追加・範囲拡張した他、遺跡名の変更を実施した。その改訂版の詳細については「マッピングぐんま 遺跡・文化財」(<http://www2.wagmap.jp/pref-gumma/top/select.asp&npr=dtp=86/pl=3>)で参照願いたい。本書では第1表および本章にできるだけ最新情報を記載した。
3. 報告書では遺構外遺物が掲載漏れしており、今後再報告したいと考えている。
- 長野原町教育委員会 1995『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第4集
4. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『新田西沢遺跡 新田平林遺跡』
5. 中隆之 1979『石畠遺跡概報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
- 中隆之 1988『石畠岩陰遺跡』『群馬県史』資料編1
- その他の参考文献は文献2・42・46・56・74。
6. 平成26年度から継続的な学術調査を計画して実施された。現在の地表では5か所の岩陰が確認されており、今年度は西端の1号岩

陰の岩陰部およびテラス部にトレンチを設定して掘り下げを行った。両トレンチで灰層を確認した段階までであるが、包含層からは後期を除く早期～晚期の縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、陶磁器、獸骨・人骨等が出土している。繰り返し岩陰が利用されている状況が把握され、利用開始時期も草創期まで遡る可能性を残している。次年度以降の調査に期待したい。

國學院大學考古学研究室 2014～2017『居家以岩陰遺跡発掘調査現地説明会』レジュメ

國學院大學考古学研究室 2017『群馬県吾妻郡長野原町居家以岩陰遺跡 2014年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告 第53集

7. 旧横壁勝沼遺跡。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

その他の参考文献は文献2・74。

8. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009『檜木II遺跡(2)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第27集

その他の参考文献は文献2・74。

9. 旧立馬遺跡。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006『立馬I遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

その他の参考文献は1・2・66・74・77。

10. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009『立馬III遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第26集

その他の参考文献は74・77。

11. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007『三平I・II遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集

長野原町教育委員会 2013『三平I遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第26集

その他の参考文献は文献1・2・74。

12. 註11と同じ。その他の参考文献は文献1・2・74・77。

13. 註7と同じ。その他の参考文献は文献66・74。

14. 長野原町教育委員会 2015『林地区遺跡群』長野原町埋蔵文化財調査報告第30集

15. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006『立馬II遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集

その他の参考文献は7文献4・74・77。

16. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『幸神遺跡・上原IV遺跡・山根田遺跡(2)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

その他の参考文献は文献2・74。

17. 註7と同じ。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005～2014『横壁中村遺跡(2)～(14)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5・7・10・20・22・29・30・34・37・41・44集

その他の参考文献は文献1・2・35・58・74・78・79・86・88・90。

18. 註7・16と同じ。今年度、町営横壁土地改良事業に伴い、確認調査を実施した際、押型文土器片が出土している。その他の参考文献は文献2・74。

19. 註14と同じ。隣接地を事業団も調査している。

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2015『上原I遺跡・上原III遺跡・林宮原遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う

その他の参考文献は文献2・74。

20. (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2014『長野原城跡・林中原Ⅰ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第43集

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『年報29』

その他の参考文献は文献1・2・74。

21. 註7と同じ。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005『川原湯勝沼遺跡(2)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集

22. 註14と同じ。その他の参考文献は文献1・2・74。

23. 註14・16と同じ。その他の参考文献は文献1・2・74・86。

24. 註7と同じ。その他の参考文献は2・74。

25. 未報告。長野原町教育委員会 2009『町内遺跡図』長野原町埋蔵文化財調査報告第18集

その他の参考文献は1・2・35・88。

26. (財・公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008・2017『上ノ平Ⅰ遺跡(1)・(2)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第23・49集

その他の参考文献は文献1・2・35・73・74・79。

27. (財・公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002~2014『長野原一本松遺跡(1)~(7)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1・15・19・24・28・40・42集

その他の参考文献は文献1・2・35・53・65・66・74・78・79・86・88・90。

28. 林中原Ⅱ遺跡以外は未報告。林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡はひと続きの集落と考えられ、町教委でもこれまで小規模ながら林中原Ⅰ遺跡で17次、林中原Ⅱ遺跡で12次にわたる調査を実施している。林中原Ⅰ遺跡は中期後半の住居跡も数軒検出されているが、後期初頭~前葉が主体のようである。事業団調査では林中原Ⅱ遺跡の国道部分で中期後半~後期初頭を主体とした住居跡が122軒検出されており、2遺跡間での集落変遷が考えられる。東宮遺跡・石川原遺跡は天明泥流に埋没したムラの下で検出されている。

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2015『林中原Ⅱ遺跡(1)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第47集

(財・公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009~2017『年報28・29・34~36』

29. 註7と同じ。

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2015『尾坂遺跡(2)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第48集

30. (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2017『上原Ⅲ遺跡(2) 久々戸遺跡(3)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第50集

31. 古屋敷遺跡は厳密にいえば複数高原地帯であるが、ここに列記しておく。

長野原町 1976『長野原町誌』上巻

32. 長野原町教育委員会 2010『林中原Ⅰ遺跡IV』長野原町埋蔵文化財調査報告第20集

その他の参考文献は文献1・2・35・52・74・86。

33. 中沢道彦 1998『「水」式』の細分と構造に関する試論』『長野県小諸市水道跡発掘調査資料図譜』第三冊 水道跡発掘調査資料 国譜刊行会

34. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2004『久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

35. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007『下原遺跡Ⅱ』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集

36. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による平成21年度の調査で検出された。また同じ時期に長野原町教育委員会でも隣接地を調査した際、弥生時代中期前半を中心とした竪穴状遺構1基のほか数基の土坑が検出された。

長野原町教育委員会 2011『町内遺跡X』長野原町埋蔵文化財調査報告第21集

37. 註29と同じ。

38. 註14と同じ。

39. 註7と同じ。その他の参考文献は文献52・58。

40. 註7と同じ。

41. 長野原町教育委員会 2004『林宮原遺跡II』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集

42. 註14と同じ。

43. 註14と同じ。

44. 未報告。

45. 未報告。

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2016・2017『年報35・36』

46. 未報告。既往調査近世面の報告は註34と同じ。

47. 未報告。

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015~2017『年報34~36』

48. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2010『東原I・II・III遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第35集

49. 公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2012『檜木I遺跡・上原IV遺跡(2)・西久保IV遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第39集

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『年報29』

50. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『檜木II遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

51. 註7と同じ。

52. 註14と同じ。

53. 註14と同じ。

54. 註14と同じ。

富田孝彦 2014「上原III遺跡の鍛冶工房跡」『ぐんま地域文化』第42号 一般財團法人群馬地域文化振興会

55. 註14と同じ。

56. 註41と同じ。

長野原町教育委員会 2012『林宮原遺跡VII』長野原町埋蔵文化財調査報告第23集

57. 今年度、町営横壁土地改良事業に伴い発掘調査を実施した際に住居跡、陥し穴、焼土遺構が検出された。

58. 今年度、町営横壁土地改良事業に伴い確認調査を実施した際に遺構・遺物が確認された。

59. 註58と同じ。

60. 文献1・2・35・36・38・41・59。

61. 註3と同じ。

その他参考文献は、文献1・2・35・36・38・41・50・59。

62. 文献2。

63. 註14・20と同じ。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009・2010『年報28・29』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008・2010『遺跡は今』第16号・第18号

64. 文献41。

65. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006『上郷B'遺跡 廣石A遺跡 二反沢遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
66. 姫恋村教育委員会 1981『鎌原遺跡発掘調査概報 浅間山噴火による埋没村落の研究』
- 姫恋村教育委員会 1994『埋没村落 鎌原遺跡発掘調査概報(よみがえる延命寺)』
67. 未報告。これら長野原町市街地の被災の状況から後述する町遺跡(40)と同一遺跡である。水特法関連事業に関しては 別稿により報告する予定である。このことに関しては以下の報告でも触れている。なお、「青面金剛塔」は雲林寺参道に安置してある。
- 長野原町教育委員会 2016『町内遺跡XV』長野原町埋蔵文化財調査報告第31集
68. 未報告。町道長野原線道路改良事業に伴い、平成24年度から平成26年度に発掘調査を実施した。天明畠・小屋等が検出されている。その他参考文献は文献57。
69. 註68と同じ。
70. 註7と同じ。
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2017『下田遺跡(2)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第52集
- その他の参考文献は文献1・2・58・61・74。
71. 註7・34と同じ。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2003『久々戸遺跡・中棚II遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- その他の参考文献は文献1・2・58・69・74・75。
72. 註71と同じ。その他参考文献は、文献1・2・51・54・55・57・58・69・74・75。
73. 未報告。今年度も事業団により発掘調査が実施され、天明期のムラが検出されている。
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009・2015~2017『年報28・34~36』
74. 今年も事業団により発掘調査が実施され、天明期のムラが検出されている。これまでの成果は以下の通りである。
- (財・公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2011・2012・2017『東宮遺跡(1)・(2)・(3)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第34・38・51集
- その他の参考文献は文献57・58・74・80~84。
75. 註34と同じ。その他の参考文献は文献58・74。
76. 註21と同じ。その他の参考文献は文献57・58・68・69・74・75。
77. 註49と同じ。文献16。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001・10『年報20・29』
78. 註7・29と同じ。
- 群馬県・公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012『尾坂遺跡』社会資本整備総合交付金事業(活力創出基盤整備)
長野原草津口駅舎整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- その他、参考文献は文献58・74。
79. 註71と同じ。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998『長野原久々戸遺跡』県道長野原草津口停車場線道路(橋梁)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- その他参考文献は文献51・54・55・57・58・61・68・69・74・75
80. 註14と同じ。

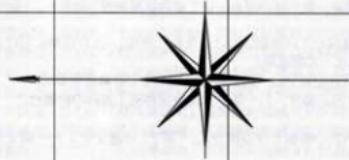
参考文献(第1表の文献番号に対応)

- 長野原町 1976『長野原町誌』上巻
- 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡―町内遺跡詳細分布調査―』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
- 長野原町教育委員会 1990『クヌギII遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第2集
- 長野原町教育委員会 1992『長政II遺跡 坪井遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第3集
- 長野原町教育委員会 1995『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第4集
- 長野原町教育委員会 1996『向原遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第5集
- 長野原町教育委員会 1998『龍原田遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第6集

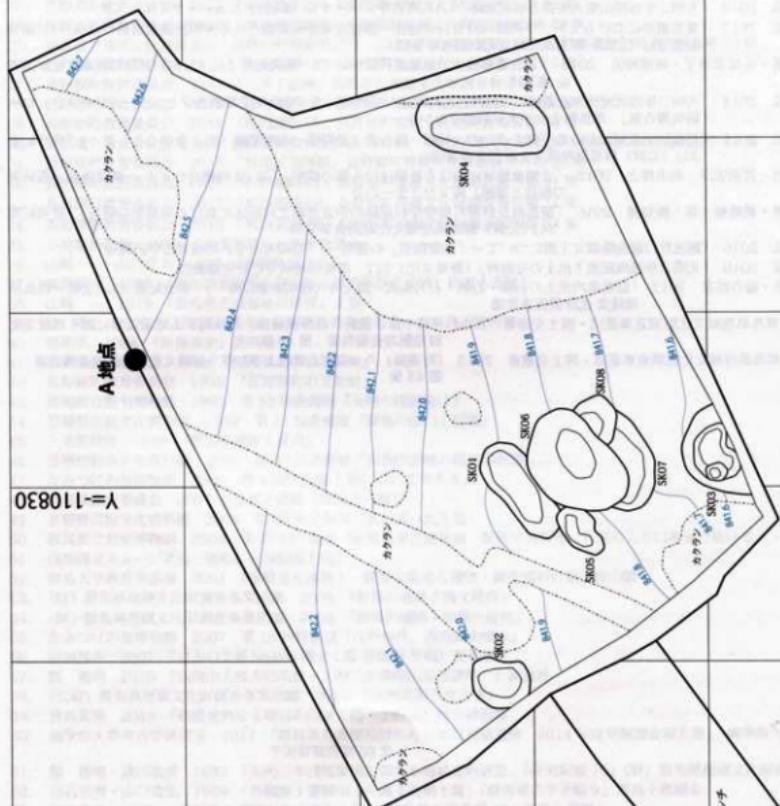
8. 長野原町教育委員会 2000 『坪井遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第7集
9. 長野原町教育委員会 2001 『幕坪遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第8集
10. 長野原町教育委員会 2002 『町内遺跡Ⅰ』長野原町埋蔵文化財調査報告第9集
11. 長野原町教育委員会 2003 『町内遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第10集
12. 長野原町教育委員会 2003 『町内遺跡Ⅲ』長野原町埋蔵文化財調査報告第11集
13. 長野原町教育委員会 2005 『小林家屋敷跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第12集
14. 長野原町教育委員会 2004 『坪井遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集
15. 長野原町教育委員会 2004 『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
16. 長野原町教育委員会 2005 『町内遺跡Ⅴ』長野原町埋蔵文化財調査報告第15集
17. 長野原町教育委員会 2006 『町内遺跡Ⅵ』長野原町埋蔵文化財調査報告第16集
18. 長野原町教育委員会 2008 『町内遺跡Ⅶ』長野原町埋蔵文化財調査報告第17集
19. 長野原町教育委員会 2009 『町内遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第18集
20. 長野原町教育委員会 2010 『町内遺跡Ⅸ』長野原町埋蔵文化財調査報告第19集
21. 長野原町教育委員会 2010 『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第20集
22. 長野原町教育委員会 2011 『町内遺跡Ⅹ』長野原町埋蔵文化財調査報告第21集
23. 長野原町教育委員会 2012 『町内遺跡Ⅺ』長野原町埋蔵文化財調査報告第22集
24. 長野原町教育委員会 2012 『林宮原遺跡Ⅸ』長野原町埋蔵文化財調査報告第23集
25. 東京電力株式会社群馬支店・長野原町教育委員会 2013 『山岸Ⅱ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第24集
26. 長野原町教育委員会 2013 『町内遺跡Ⅻ』長野原町埋蔵文化財調査報告第25集
27. 長野原町教育委員会 2013 『三平Ⅰ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第26集
28. 長野原町教育委員会 2013 『町内遺跡Ⅹ』長野原町埋蔵文化財調査報告第27集
29. 長野原町教育委員会 2014 『町内遺跡ⅩN』長野原町埋蔵文化財調査報告第28集
30. 東京電力株式会社群馬支店・長野原町教育委員会 2014 『湯原Ⅳ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第29集
31. 長野原町教育委員会 2015 『林地区遺跡群』長野原町埋蔵文化財調査報告第30集
32. 長野原町教育委員会 2016 『町内遺跡ⅩV』長野原町埋蔵文化財調査報告第31集
33. 長野原町教育委員会 2017 『町内遺跡ⅩVI』長野原町埋蔵文化財調査報告第32集
34. 長野原町教育委員会 2018 『町内遺跡ⅩVII』長野原町埋蔵文化財調査報告第33集
35. 小池富治郎編 1936 『吾妻郡誌』吾妻教育学会
36. 山崎一・山口武夫 1972 『吾妻郡城壁史』
37. 塩野新一 1972 『群馬県吾妻郡長野原町(群馬県指定史跡)勘場木遺跡』
38. 山崎一 1978 『群馬県古墳墓址の研究』上巻
39. 中 隆之 1979 『石畳遺跡概報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
40. 群馬県 1988 『群馬県史』資料編1
41. 群馬県教育委員会 1988 『群馬県の中世城館跡』
42. 長野原町教育委員会 1989 『長野原町の文化財』
43. 群馬県立歴史博物館 1995 第52回企画展「天明の浅間使け」
44. 笠懸野岩宿文化資料館 1999 第25回企画展「群馬の注口土器展」
45. 上毛新聞社 1999 『群馬県遺跡大辞典』
46. 笠懸野岩宿文化資料館 2000 第30回企画展「利根川流域の縄文草創期」
47. かみつけの里博物館 2000 第6回特別展「銅について考える」
48. 群馬県教育委員会 2001 『群馬の史跡(原始古代編)』
49. 笠懸野岩宿文化資料館 2004 第39回企画展「底の尖った土器」
50. 群馬県立歴史博物館 2004 第77回企画展「新発見考古速報展 群馬発掘情報 石室の入り口を通り抜けると・・・」
51. 浅間縄文ミュージアム 2004 『浅間獄大焼』
52. 群馬大学教育学部編 2004 『尾崎喜左雄博士 調査収集考古遺物・調査資料目録』雄山閣
53. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2005 『群馬の遺跡2 繩文時代』
54. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2005 『群馬の遺跡7 中世~近代』
55. かみつけの里博物館 2007 第16回特別展「江戸時代、浅間山大噴火」
56. 原田昌幸 2007 「日本の美術 No495 縄文土器 繩文期 早期」至文堂
57. 関 俊明 2010 『浅間山大噴火の爪痕~天明三年浅間山災害遺跡~』新泉社
58. (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2013 『自然災害と考古学』
59. 宮坂武男 2015 『信濃をめぐる境目の山城と館』上野編』戎光洋出版社
60. 國學院大學考古学研究室 2017 『群馬県吾妻郡長野原町居家以岩陰遺跡 2014年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第53集
61. 関 俊明・諸田康成 1999 『天明三年浅間災害に関する地域史的研究』『研究紀要16』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
62. 白石光男・山口逸弘 1999 『外輪原I遺跡出土の縄文前削土器』『群馬考古学手帳9』群馬士器観会
63. 富田孝彦 2000 『外輪原I遺跡出土の彌生土器』『群馬考古学手帳10』群馬士器観会
64. 谷藤保彦・関根慎二・今井和久 2002 『群馬県内出土の縄文時代石製装身具集成』『研究紀要20』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
65. 関根慎二 2003 『群馬県における加曾利E式土器の地城相』『第16回縄文セミナー 中期後半の再検討』縄文セミナーの会
66. 石田 真 2004 『群馬県北西部における階下穴の構築時期をめぐってー長野原町の事例を中心としてー』『研究紀要22』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
67. 関 俊明 2005 『天明三年浅間山噴火災害遺跡の調査と成果』『日本歴史』吉川弘文館
68. 関 俊明 2006 『天明泥流はどう流下したか』『ぐんま史料研究』24 群馬県立文書館
69. 中央防災会議 2006 『1783天明浅間山噴火報告書』内閣府
70. 藤巻幸男 2007 『縄文時代中期の住居内施設についてー横壁中村遺跡発見』『研究紀要25』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

71. 谷藤保彦 2007 「加曾利E式の系統を引く土器群—北関東における後期初頭の様相一」『第20回縄文セミナー 中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
72. 関根慎二 2008 「浅間山を廻る縄文土器」『研究紀要 26』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
73. 山口逸弘 2009 「上ノ平遺跡 31号住居跡出土土器の再検討」『研究紀要 27』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
74. 藤巻幸男 2009 「ハッ場ダム建設地域における調査遺跡一覧作成の試み—出土遺物総量把握の効用—」『研究紀要 27』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
75. 黒澤照弘・大西雅広 2009 「茨城県、栃木県、群馬県内の江戸後期における生産と流通」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 関東・東北・北海道編』
76. 山口逸弘 2010 「勝坂系」土器に関する再検討『研究紀要 28』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
77. 橋本淳 2010 「中部地方における繩紋早期北線紋土器の編年—ハッ場ダム関連遺跡出土資料の位置付けー」『研究紀要 28』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
78. 鈴木徳雄 2012 「縄之内式土器研究の諸問題—縄之内式の概観と周辺諸型式」『第25回縄文セミナー 縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会
79. 山口逸弘 2013 「吾妻川中流域における縄文時代中期後葉の土器様相—加曾利E-I式古段階を中心として—」『研究紀要 31』(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
80. 黒澤照弘 2012 「東宮遺跡—天明三年8月5日の様相—」『江戸遺跡研究会報№133』江戸遺跡研究会
81. 黒澤照弘 2013 「天明三年浅間山噴火災害と東宮遺跡」『月刊考古学ジャーナル (646)』ニュー・サイエンス社
82. 黒澤照弘 2013 「東宮遺跡における天明三年新曆八月五日の様相—調査成果から推測される天明泥流被害前の状況—」『研究紀要 31』(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
83. 伊藤美香・小原奈津子・黒澤照弘 2013 「東宮遺跡出土の纖維遺物について」『研究紀要 31』(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
84. 大塚昌彦 2014 「天明三年浅間泥流埋没遺跡の守随軒と高崎鉢座」『群馬県立女子大学第2期群馬学センターリサーチフェロー研究報告集』 群馬県立女子大学群馬学センター
85. 山口逸弘 2015 「吾妻川中流域における「郷土式」の一様相—報告書『長野原一本松遺跡(6)』を中心として—」『研究紀要 33』(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
86. 小川卓也・宮田忠洋・向出博之 2015 「北関東地域における後期注口土器の様相」『第28回縄文セミナー 縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会
87. 藤巻幸男・横崎修一郎・能登健 2016 「群馬県長野原町横壁中村遺跡の中近世墓と同地区における両墓制の研究」『研究紀要 34』(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
88. 山口逸弘 2016 「鋸歯状口縁曲隆線文土器について—「横壁類型」の提唱—」『地域考古学』地域考古学研究会
89. 大塚昌彦 2016 「天明三年浅間泥流下出土の守隨軒」『群馬文化』327 群馬県地域文化研究協議会
90. 谷藤保彦・瀧谷昌彦 2017 「群馬県内出土の石棒・石劍・石刀集成—縄文時代後期前葉以降—」『研究紀要 35』(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
91. (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2014 「林中原I遺跡・長野原城跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第43集
92. (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2015 「町遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第45集

Y=110820



0 1:60 3m



Y=110830

X= 64070

第4図 調査区全体図 (S=1/60)

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 土坑

SK01 (第5・8図／PL 2・3・5)

位置 調査区南西側。

重複関係 SK05・06と重複し、これらに切られる。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は長楕円形を呈する。規模は長軸123cm、短軸54cm、確認面からの深さ25cmを測る。

主軸方位 N-58°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器片4点(90g)である。そのうち縄文土器2点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代中期前半に帰属するものと考えられる。

SK02 (第5・8図／PL 3・5)

位置 調査区西壁沿い。

重複関係 なし。

遺存状態 一部調査区外へ延びているが検出部分は良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸66cm、短軸58cm、確認面からの深さ20cmを測る。

主軸方位 N-4°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 凹状を呈している。

遺物 総出土量は土器片4点(36g)、石器(剥片石器含む)1点(0.5g)である。そのうち縄文土器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代中期前半に帰属するものと考えられる。

SK03 (第5・8図／PL 3・5)

位置 調査区南東コーナー。

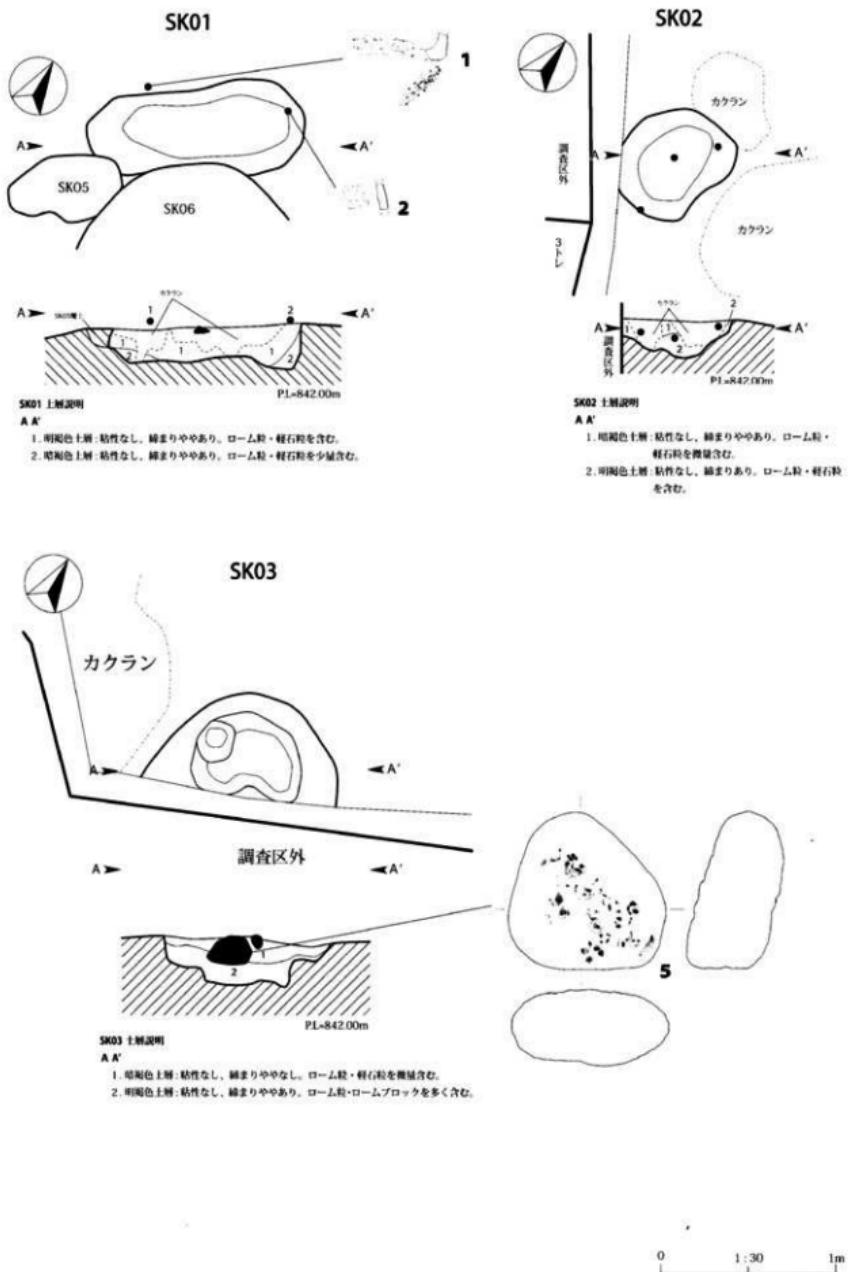
重複関係 なし。

遺存状態 約1/2が調査区外へ延びているが検出部分は良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈すると考えられる。規模は長軸110cm+α、短軸60cm+α、確認面からの深さ29cmを測る。

主軸方位 N-1°-W。



第5図 SK01～03実測図 (1/30)

壁面 階段状に立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器片1点(3g)、石器(剥片石器含む)1点(9.500g)である。そのうち縄文土器1点、礫石器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代中期前半に帰属するものと考えられる。

SK04(第6・8図／PL3・5)

位置 調査区東南コーナー。

重複関係 なし。

遺存状態 東壁の立ち上がりが攪乱により消失しているが、全体的には良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は長楕円形を呈する。規模は長軸150cm、短軸66cm、確認面からの深さ68cmを測る。

主軸方位 N-6°-E。

壁面 やや外傾して立ち上がっている。

底面 凹状を呈している。

遺物 総出土量は土器片4点(31g)である。そのうち縄文土器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代中期前半に帰属するものと考えられる。

SK05(第6・8図／PL4・5)

位置 調査区南西側。

重複関係 SK01・06と重複し、SK01を切り、SK06に切られる。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸65cm、短軸38cm、確認面からの深さ36cmを測る。

主軸方位 N-51°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 凸凹している。

遺物 総出土量は土器片4点(174g)、石器(剥片石器含む)1点(139g)である。そのうち縄文土器2点、礫石器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代中期前半に帰属するものと考えられる。

SK06(第7・8図／PL4・5)

位置 調査区南西側。

重複関係 SK01・05・07・08と重複し、それらすべてを切っている。

遺存状態 良好。

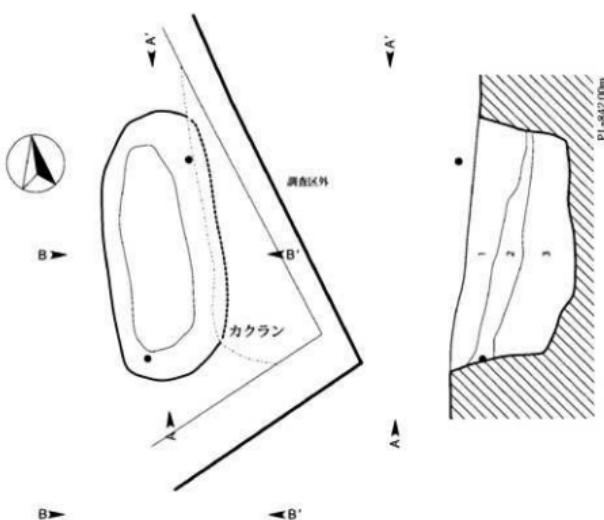
覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸127cm、短軸92cm、確認面からの深さ52cmを測る。

主軸方位 N-58°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

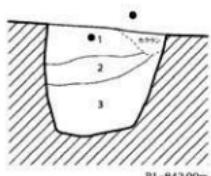
SK04



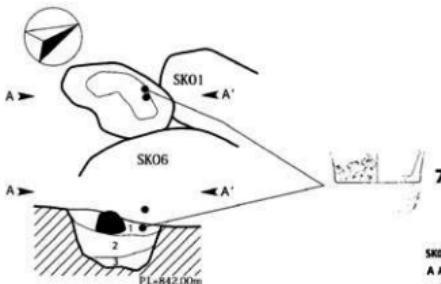
SK04 上層説明

A A' B B'

1. 暗褐色土層: 黏性なし。締まりあり。ローム粒・軽石粒を微量含む。
2. 暗褐色土層: 黏性なし。締まりややあり。漂・ローム粒・軽石粒を含む。
3. 明褐色土層: 黏性なし。締まりややなし。ローム粒・軽石粒を含む。



SK05



SK05 上層説明

A A''

1. 暗褐色土層: 黏性なし。締まりあり。ローム粒・軽石粒を微量含む。
2. 暗褐色土層: 黏性なし。締まりややあり。ローム粒・軽石粒を少量含む。
3. 明褐色土層: 黏性なし。締まりややなし。ローム粒・軽石粒を含む。

0 1 : 30 1m

第6図 SK04-05実測図 (1/30)

底面 盔状を呈している。

遺物 総出土量は土器片7点(143g)、石器(剥片石器含む)2点(483.4g)である。そのうち縄文土器5点、剥片石器1点、礫石器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代中期前半に帰属するものと考えられる。

SK07 (第7・8図／PL 4・5)

位置 調査区南西側。

重複関係 SK06・07と重複し、それらに切られている。

遺存状態 全体の約1/2が遺存している。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は橢円形を呈すると考えられる。規模は長軸106cm + α、短軸70cm + α、確認面からの深さ22cmを測る。

主軸方位 N-59°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器片9点(99g)である。そのうち縄文土器2点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代中期前半に帰属するものと考えられる。

SK08 (第7図／PL 4)

位置 調査区南西側。

重複関係 SK06・07と重複し、SK07を切り、SK06に切られている。

遺存状態 全体の約1/2が遺存している。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は橢円形を呈すると考えられる。規模は長軸40cm + α、短軸36cm + α、確認面からの深さ24cmを測る。

主軸方位 N-69°-W。

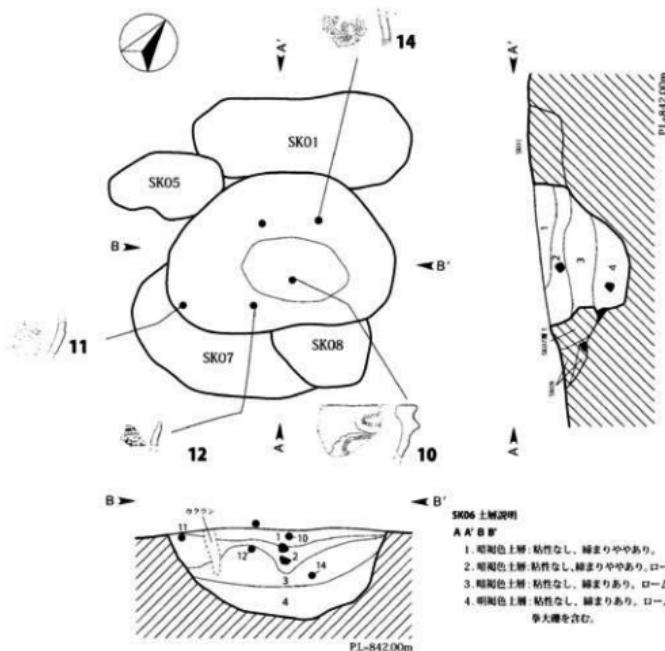
壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 傾斜している。

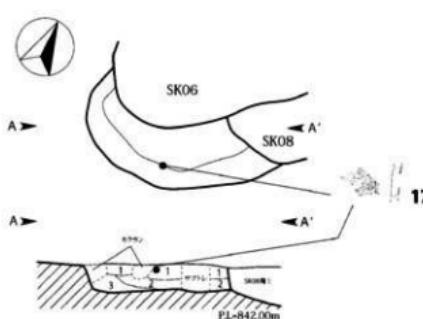
遺物 なし。

備考 本土坑は重複関係から縄文時代中期前半に帰属するものと考えられる。

SK06



SK07

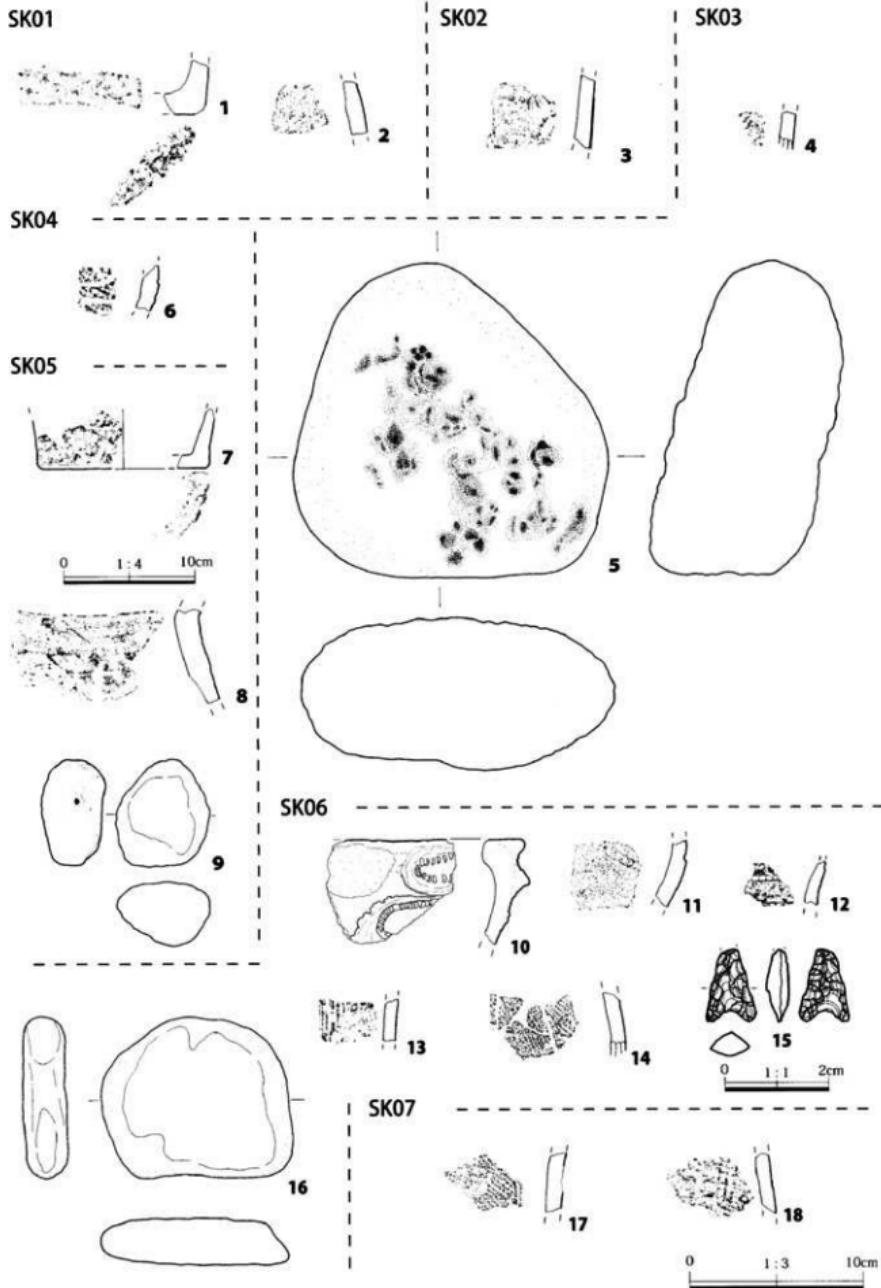


SK08



0 1:30 1m

第7図 SK06~08実測図 (1/30)



第8図 土坑出土遺物実測図

第2節 遺構外出土遺物

ここでは調査区表土および遺構内流れ込み遺物、トレンチ出土遺物を一括して取り扱う。遺構外出土遺物は縄文時代中期前半～後半と近世のものに限って見られた。

1. 土 器

(1) 縄文時代中期前半（第9図1・2）

第9図1・2は体部外面の施文に半截竹管による平行沈線文を用いており、勝坂系（勝坂1式）に比定される。

(2) 縄文時代中期後半（同図3）

同図3は隆帶による渦巻文構成と共に平行沈線を充填しており、郷土式に比定される。

(3) 近世陶器・瓦器（同図4・5）

同図4は瀬戸美濃系陶器の徳利の肩部～体部片と考えられる。同図5は時期・器種ともに特定はできなかったが、瓦質で体部外面に細かい印刻状の文様を施すことから火鉢と考え、ここに分類しておく。

2. 石 器

(1) 剥片石器類（同図6）

同図6のみで石鎚製品の破損品である。

(2) 打製石斧類（同図7）

同図7のみであるが、打製石斧の刃部で基部は折れて欠損している。

(3) 磲石器類（同図8～11・第10図12～14）

a. 磨石（同図8・9）

b. 凹石（同図10・11）

c. 複合石器（第10図12・13）

aを基本とし、bや敲石と組み合わさる場合が多い。第10図12は磨石+凹石、同図13は磨石+敲石である。

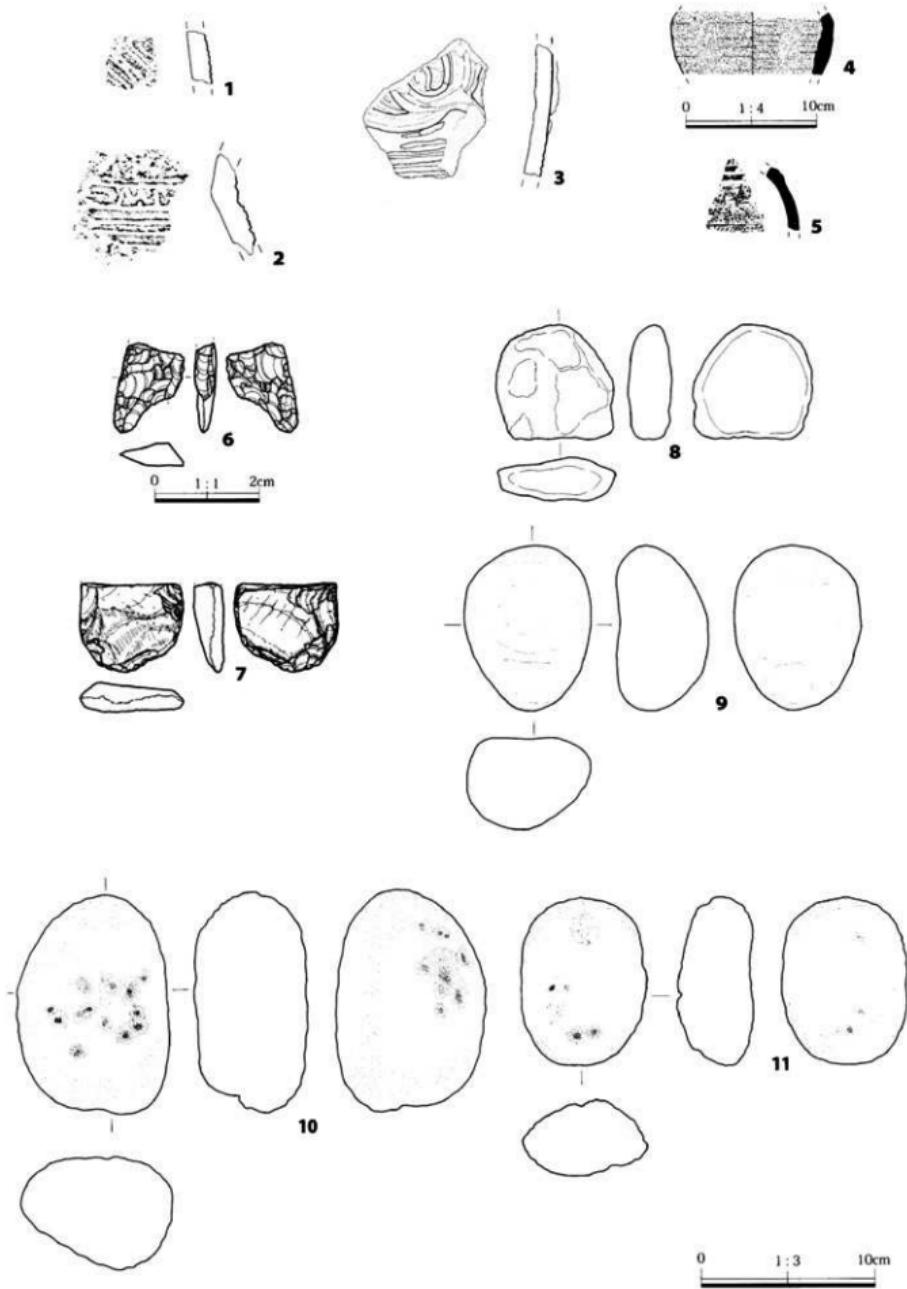
d. 砥石（同図14）

類例に乏しいが、3面に同一方向への線状痕が認められる。金属製品の研ぎに使用したものと考えた。

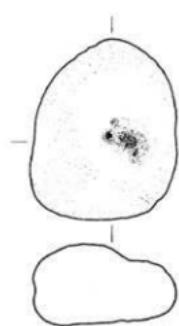
3. 石 製 品

(1) 磨臼（第11図15）

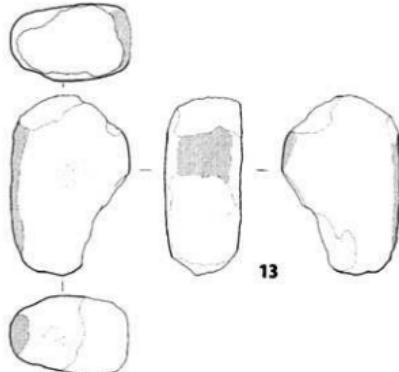
第11図15のみで、下臼である。未製品の破損品と考えられる。砸き目には通常6分割された主溝、その中に副溝を設けられるが、約12cm間隔で主溝を入れる箇所への割り付けの痕跡が認められる。



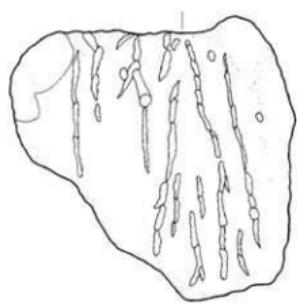
第9図 遺構外出土遺物実測図1



12



13

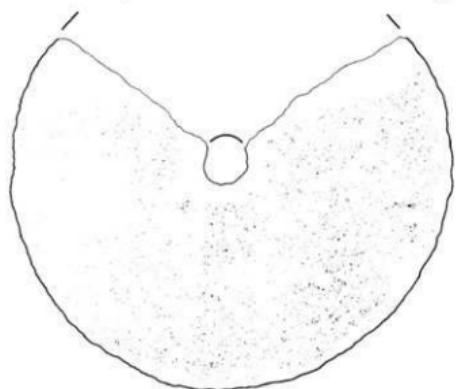
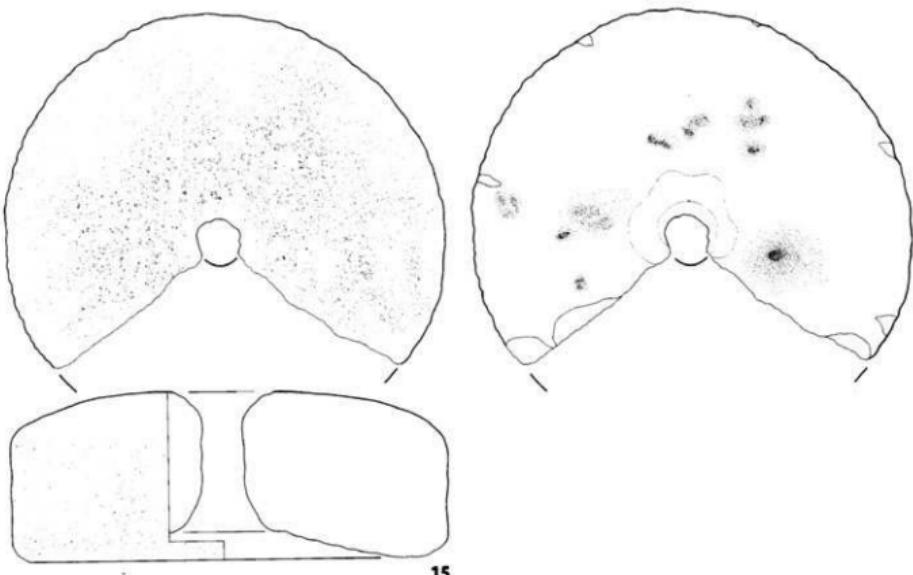


14



0 1 : 3 10cm

第10図 遺構外出土遺物実測図 2



0 1 : 3 10cm

第11図 遺構外出土遺物実測図 3

第4章 調査の成果と課題

はじめに

今回の調査は町道6-4号線の道路改良工事に伴うもので、僅か46m²の調査であったが、縄文時代中期前半に帰属すると考えられる土坑8基が検出された。前述したとおり、本遺跡は大局的に見れば吾妻川流域地帯に属するが、草津町との町村境付近に位置し、本町の遺跡分布域で最北端の一つにあたる。現在、大津の交差点を起点として国道292号線が草津町へと上っていくが、江戸時代にはこの国道の北東側山沿いを旧草津街道が通っており、遺跡の分布も認められている。この周辺は大規模開発がほとんどなかったことから、遺跡群の動態に関しては不明な部分が多い。ここでは調査事例のある周辺遺跡の概要に触れて遼沢川流域の遺跡群に関して整理しておきたい。

1. 遼沢川流域の遺跡群について

(1) 勘場木遺跡（第1図18）

大津の交差点を草津町へ向かってすぐの東側台地上に立地する。昭和28年暮れに土地所有者の塩野要造氏が開墾作業中に完形土器1個を発見し、翌年初めまでに竪穴住居1軒を発掘するに至った。その後、山崎義男氏（群馬県文化財専門委員）が現地調査を実施し、昭和30年に県史跡「勘場木石器時代住居跡」に指定された。本町で最初に実施された発掘調査である。竪穴住居は直径4.5mのほぼ円形の平面形を呈し、北東から南西に向かう傾斜地を北東壁で40cm程掘り込んで床面を造っている。壁周溝は「東北部のみで発見された」と報告されているが後の精査でほぼ全周していることが確認されている。中央に2基の地床が、周囲に12基の柱穴が配置されている。出土遺物は縄文時代中期後半（加曾利E2式期）の土器・石器が主体だが、前期土器（黒浜式期・諸磕a式期）、後期土器（堀之内2式期）、土師器が含まれている。なお、平成30～32年度で保存処理事業を計画しており、住居跡の再調査・測量の後、経年劣化している遺構面の復元及び保存処理を施し、出土遺物の再整理を実施して報告書にまとめる予定である。

(2) 立石遺跡（第1図14）

勘場木遺跡から更に草津方面へ向かったこの街道沿いでは比較的広い段丘面に立地する。平成15年度に集会所建設に先立ち確認調査を実施した。対象地は以前建物が建っていたため全体的に擾乱を被っており、遺構を検出するには至らなかったが縄文時代中期の土器片と黒曜石が出土している。

(3) 赤羽根遺跡（第1図11）

立石遺跡の北東側の台地上に立地する。遺跡周辺は旧草津街道が通っていたことが知られており、「赤羽根の一里松」や現在一里松の根元に移設され「左草津へ、右入山へ」と刻まれた「道しるべ」が往時を偲ばせる。平成28・29年度に太陽光発電所建設に先立って確認調査を実施している。開発は遺跡のほぼ全面を対象としており、対象地内に41本のトレンチを設定して、土層の堆積状況と遺構の有無を調査した。その結果、大きく5箇所、約2haの本調査が必要な区域に絞ることができた。出土遺物から、縄文時代前期初頭、中期前半、後期初頭、平安時代の遺構が検出された。現在も協議中で平成30～31年度で本発掘調査予定である。

(4) クヌギⅡ遺跡（第1図13）

立石遺跡の北側の台地上に位置する。昭和63年度に土地所有者が私設の電柱を設置する際、注口土器と敷石を発見し、緊急発掘調査を実施した。対象地内には住居跡4軒と屋外埋設遺構1基が検出された。期間の関係で完掘したのは敷石住居1軒と屋外埋設遺構のみであったが、出土遺物から住居跡はいずれも縄文時代後期前葉（塙之内1式期）の敷石住居と考えられる。屋外埋設遺構は逆位の埋甕が出土し、縄文時代中期前半（勝坂式期）に比定されている。また遺構外出土遺物は縄文時代前期～後期前葉までの広範囲な時期に及んでいる。

2. 遺跡群の立地から看取される動態について

遼沢川の下流から上流に向けて調査事例のある遺跡を概観した結果、以下の傾向が看取された。ここでは勘場木遺跡を下流域、立石遺跡を中流域、観奈遺跡を上流域と仮定しての話をする。

①下流～中流域の国道と同レベルの段丘面には縄文中期後半を主体とした集落で構成されている可能性が高い。

規模はそれほど大きくないが、立石遺跡の立地する段丘面は周辺の中では広く、やや大きな規模の集落が営まれている可能性が高い。また集落が中期後半～後期前葉まで継続的に営まれているとしたら、中期後半の集落の外縁に後期集落が営まれていく可能性が高い。

②下流～中流域の国道から一段上の斜面地では後期初頭～前葉を主体とした集落で構成されている可能性が高く、早期・前期・中期前半が交じてくると考えられる。さらにその上の台地上では早期・前期・中期前半が主体となると考えられる。

③上流域は観奈遺跡だけだが、中期前半を主体とし、早期・前期が交じてくると考えられる。また遺構外出土遺物で中期後半の郷土式と考えられる土器片も出土していることから、段丘面では小規模ながら当該期の集落を想定してもよいであろう。旧草津街道が山側を通っていたことを鑑みると、観奈遺跡のある洞口ほらぐちという地名からも巨大な岩体で閉塞していたことが想定される。

④平安時代は下流～上流域、段丘～台地に関係なく、集落が営まれていたと考えられる。

3.まとめ

以上、観奈遺跡の調査結果をもとに、遼沢川流域の遺跡群の立地から看取される動態を想像豊かに読み解いてみた。他の流域と同様、遼沢川流域でも支流沿いに遺跡の分布が認められる。下流域～上流域、段丘～台地と2方向の軸で時代・時期毎の占地の傾向を観てきたが、第2章で触れたハッ場地区での遺跡群の動態の傾向とほぼ合致してくることが明らかとなってきた。調査事例が少ないとから想像の域に出ないが、今後の発掘調査で検証していきたい。

参考文献

- 塩野新一 1972 『群馬県吾妻郡長野原町（群馬県指定史跡）勘場木遺跡』
群馬県 1988 『群馬県史』資料編1
長野原町教育委員会 1990 『長野原町の遺跡－町内遺跡詳細分布調査－』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
長野原町教育委員会 1990 『クヌギⅡ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第2集
上毛新聞社 1999 『群馬県遺跡大辞典』
群馬県教育委員会 2001 『群馬県の史跡（原始古代編）』
長野原町教育委員会 2005 『町内遺跡V』長野原町埋蔵文化財調査報告第15集
東京電力株式会社群馬支店・長野原町教育委員会 2014 『澣原IV遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第29集
長野原町教育委員会 2017 『町内遺跡XVI』長野原町埋蔵文化財調査報告第32集
長野原町教育委員会 2018 『町内遺跡XVII』長野原町埋蔵文化財調査報告第33集

第2表 慶奈遺跡出土遺物觀察表

地點	深度	目録	主産	名前	11	目録	主産	名前	12	目録	主産	名前	13	目録	主産	名前	14
8.1	5	國文上層・深鉢	(3.0)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。表面はナマ仕上げである。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK01	
8.2	5	國文上層・深鉢	(3.2)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。表面はナマ仕上げである。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK02	
8.3	5	國文上層・深鉢	(3.3)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。表面はナマ仕上げである。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK03	
8.4	5	國文上層・深鉢	(2.0)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。表面はナマ仕上げである。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK04	
8.5	5	縫石器類・円筒	12.240 - 16.240 / 16.150	内向曲・内向曲	内向曲は内側に高さ約3.5cm、内側は底面に幅約3.5cm。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
8.6	5	國文上層・深鉢	(2.6)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。表面はナマ仕上げである。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK05	
8.7	5	國文上層・深鉢	(4.5)	/ - / - < 12.65	内向曲ともに縁なしガラス。底面は幅約3.5cm、内側は底面に幅約3.5cm。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK06	
8.8	5	國文上層・深鉢	(5.3)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。内側は底面に幅約3.5cm、内側は底面に幅約3.5cm。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK07	
8.9	5	縫石器類・円筒	12.60 - 16.53 / 19.37	内向曲・内向曲	内向曲は内側に高さ約3.5cm、内側は底面に幅約3.5cm。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
8.10	5	國文上層・深鉢	(6.0)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。内側は底面に幅約3.5cm、内側は底面に幅約3.5cm。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK08	
8.11	5	國文上層・深鉢	(3.9)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。内側は底面に幅約3.5cm、内側は底面に幅約3.5cm。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK09	
8.12	5	國文上層・深鉢	(2.5)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。内側は底面に幅約3.5cm、内側は底面に幅約3.5cm。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK10	
8.13	5	國文上層・深鉢	(2.3)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。内側は底面に幅約3.5cm、内側は底面に幅約3.5cm。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK11	
8.14	5	國文上層・深鉢	(3.7)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。内側は底面に幅約3.5cm、内側は底面に幅約3.5cm。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK12	
8.15	5	縫石器類・円筒	長 (1.4) / 幅 (1.0) / 高 (0.4)	内向曲・内向曲	内向曲は内側に高さ約1.0cm、内側は底面に幅約1.0cm。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
8.16	5	縫石器類・円筒	長 9.3 / 幅 11.0 / 高 2.7	内向曲・内向曲	内向曲は内側に高さ約1.0cm、内側は底面に幅約1.0cm。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
8.17	5	國文上層・深鉢	(3.5)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。内側は底面に幅約3.5cm、内側は底面に幅約3.5cm。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK07	
8.18	5	國文上層・深鉢	(3.3)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。内側は底面に幅約3.3cm、内側は底面に幅約3.3cm。	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	「色鉢」・「淡・青色」・「白鉢」	内向曲・内向曲	良好	SK07	
遺物外出土遺物觀察表																	
9.1	6	國文上層・深鉢	(3.0)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。内側は底面に幅約3.0cm、内側は底面に幅約3.0cm。	良好	内向曲・内向曲	内向曲・内向曲	良好	内向曲・内向曲	内向曲・内向曲	良好	内向曲・内向曲	内向曲・内向曲	良好	SK13	
9.2	6	縫石器・盆	(5.6)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。内側は底面に幅約5.6cm、内側は底面に幅約5.6cm。	良好	内向曲・内向曲	内向曲・内向曲	良好	内向曲・内向曲	内向曲・内向曲	良好	内向曲・内向曲	内向曲・内向曲	良好	SK14	
9.3	6	縫石器・盆	(7.4)	/ - / -	内向曲ともに縁なしガラス。内側は底面に幅約7.4cm、内側は底面に幅約7.4cm。	良好	内向曲・内向曲	内向曲・内向曲	良好	内向曲・内向曲	内向曲・内向曲	良好	内向曲・内向曲	内向曲・内向曲	良好	SK15	
9.4	6	陶器・盆	(3.5)	/ - / -	縁なし・直筒。	良好	内向曲・内向曲	内向曲・内向曲	良好	内向曲・内向曲	内向曲・内向曲	良好	内向曲・内向曲	内向曲・内向曲	良好	SK16	
9.5	6	長貝?	内向曲・内向曲	(3.5)	/ - / -	内向曲は内側を凸状、内側は底面を凸状、縁なし・直筒。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
9.6	6	直筒(直面)・石瓶	員 (1.7) - 周 (1.3) / 高 0.4	内向曲・内向曲	内向曲は内側を凸状、内側は底面を凸状。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
9.7	6	打削痕有・直筒(直面)	員 (5.1) / 高 (5.8) / 周 (1.6)	内向曲・内向曲	内向曲は内側を凸状、内側は底面を凸状。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
9.8	6	縫石器・盆	6.6 - 6.9 / 7.2 / 7.5	内向曲	内向曲は内側を凸状、内側は底面を凸状。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
9.9	6	縫石器・盆	6.9 - 7.2 / 7.5 / 8.1	内向曲	内向曲は内側を凸状、内側は底面を凸状。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
9.10	6	縫石器・盆	6.5 - 6.8 / 7.0 / 7.5	内向曲	内向曲は内側を凸状、内側は底面を凸状。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
9.11	6	縫石器・盆	6.9 - 7.3 / 7.4 / 7.5	内向曲	内向曲は内側を凸状、内側は底面を凸状。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
9.12	6	縫石器・直筒	員 10.4 - 10.8 / 9.4 / 7.5	内向曲	内向曲は内側を凸状、内側は底面を凸状。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
10.13	6	縫石器・直筒	員 10.3 - 10.8 / 9.4 / 7.5	内向曲	内向曲は内側を凸状、内側は底面を凸状。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
10.14	7	縫石器・直筒	員 16.3 - 16.5 / 16.7 / 16.9	内向曲	内向曲は内側を凸状、内側は底面を凸状。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
11.15	7	石器	33.5 / 直 13.0	内向曲	内向曲は内側を凸状、内側は底面を凸状。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

内向曲は内側を凸状、内側は底面を凸状。

写 真 図 版



1. 調査区全景（北から）



2. 調査区近景<北東側>（南から）



1. 調査区近景<南西側>（南東から）



1. SK01・05～08（南西から）



1. SK01 半截（北西から）



2. SK02 (北東から)



3. SK02 半截（南東から）



4. SK03 (北西から)



5. SK03 半截（北西から）



6. SK04 北西セクション（北西から）



7. SK04 南東セクション（南東から）



8. SK04 検出状況（南西から）



1. SK05 (北西から)



2. SK05 半截 (北西から)



3. SK06 東西セクション (南東から)



4. SK06 北セクション (北東から)



5. SK06 南セクション (南東から)



6. SK07 半截 (北西から)



7. SK08 半截 (南から)



8. 作業風景 (北東から)

SK01



SK02



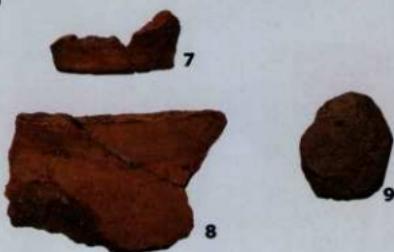
SK04



SK03



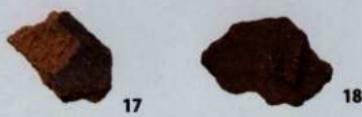
SK05

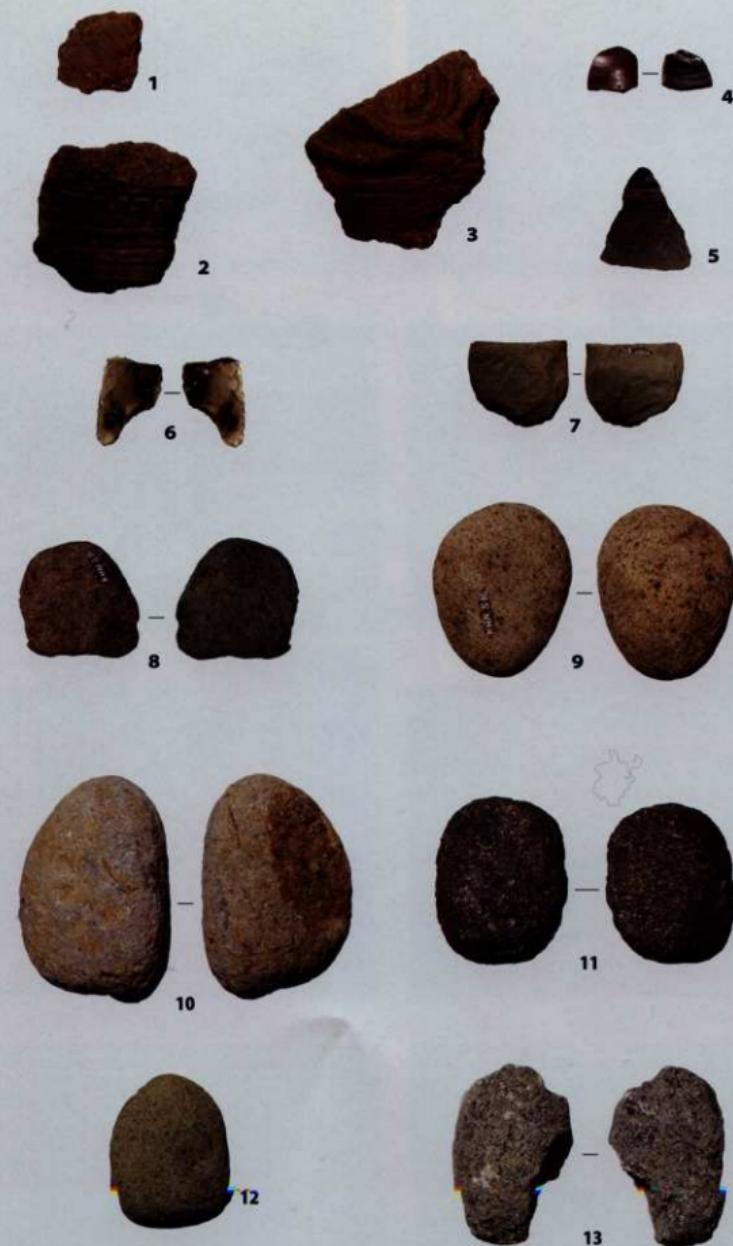


SK06



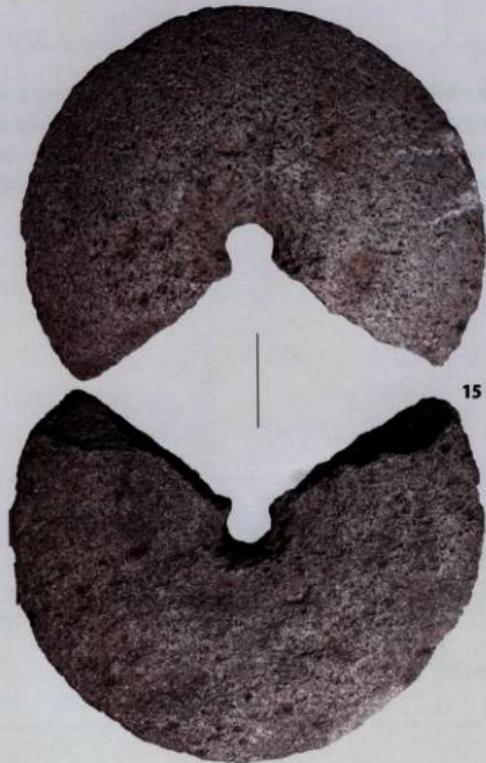
SK07







14



15

報告書抄録

ふりがな	かんないせき							
書名	観奈遺跡							
副書名	町道6-4号線道路改良工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	長野原町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第34集							
編著者名	富田孝彦							
編集機関	長野原町教育委員会							
所在地	〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町与喜屋174 TEL 0279-82-4517							
発行年月日	西暦 2018年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
かんないせき 観奈遺跡	群馬県吾妻 郡長野原町 大字大津	市町村 10424	遺跡番号 105	(世界測地系) 363415	(世界測地系) 1383542	20160913 ～ 20160926	83	町道拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
観奈遺跡	集落跡	縄文時代	土坑	8基	縄文土器・石器	中期前半土坑の検出		
要約	本遺跡は北部吾妻川流域地帯の北西部に位置し、吾妻川の支流である遅沢川の左岸段丘上に立地する。調査地点の標高は843m位である。縄文時代中期前葉の土坑8基が検出された。土坑はうち5基が重複関係を有するが、出土遺物は中期前半（阿玉台1b式～勝坂1式）にはほぼ収まることが確認された。遺構外出土遺物で中期後半の郷土式と考えられる土器片も出土していることから、周辺には中期の集落が小規模ながら存在することが想定された。							

観奈遺跡

——町道6-4号線道路改良工事に伴う発掘調査報告書——

平成30年3月20日 印刷

平成30年3月23日 発行

発行 群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋174
TEL 0279 (82) 4517 FAX 0279 (82) 4519

印刷 朝日印刷工業株式会社

